

# 伝書鳩

第25号

井上靖記念文化財団

## 落日

匈奴は平原に何百尺かの殆ど信じられぬくらいの深い穴を穿ち、死者をそこに葬り、一匹の駱駝を殉死せしめて、その血をその墓所の上に注ぐ風習があった。雑草は忽ちにしてそこを覆い、その墓所の所在を判らなくするが、翌年遺族たちは駱駝を連れて平原をさまよひ、駱駝が己が同族の血を嗅ぎ当てて咆哮するところに祭壇を造つ

て、死者に供養したと言う。

私はこの話が好きだ。この話の故に匈奴という古代の遊牧民族を信用できる気になる。因みに彼等の考え方に依れば、そのような平原を地殻と言ひ、そのような平原の果てに沈む太陽を落日と言う。そしてまたそのような平原に降り積む雪を降雪と言うのである。



落日(詩) 井上靖……………2

ご挨拶 浦城義明……………6

井上靖はなぜ、匈奴に惹かれたのか 『明妃曲』を読む 重里徹也……………8

第七回 井上靖記念文化賞 石内都氏・安彦良和氏に……………14

井上靖未発表資料\*9

終戦前後日記③ (監修・解説 高木伸幸)……………22

祖父・井上靖探し 井上敦夫……………54

鳩のおしらせ……………59

令和五年度 事業報告……………60

鳩のカット 福井欧夏  
花のカット 黒田佳子  
奥付のカット 岩永泉

## ご挨拶

理事長 浦城義明

今年 は年始の能登半島地震から始まり、夏のパリオリンピック・パラリンピック、ドジャースの大谷翔平フィーバー、そして秋の総選挙で自公過半数割れ…：色々な出来事が慌たしい速度で過ぎていった一年でした。情報溢れる令和の世は移ろいがとても早く感じます。

理事長に就任して以来、全国各地にある井上靖の業績を展示している施設を見て回っています。この夏は、これまでなかなか行く機会がなかった北上市の日本現代詩歌文学館を訪れました。館内にある井上靖記念室は「詩の宝石箱が納められた小さな土蔵」というコンセプトの素敵なしつらえて、部屋の中には小さい箱がいくつもあり、覗き込むとそこに詩が納められています。安らぎと温かさを感じる、とても居心地の良い空間でした。またきれいに整えられた庭には名誉館長を務めた靖揮毫の碑もあります。

こうした市町村により運営されている展示室は、他にも高月町（滋賀県）や日南町（鳥取

県）などがあります。また文学碑に至っては全国五十以上あると言われており、とても回り切れておりません。次はどの地を訪れようかと、私の密かな楽しみになっています。

今年度から本財団の役員に新しく加わった方をご紹介します。新評議員に映画監督の原田真人氏。靖とは沼津東高校の同窓であり、映画『わが母の記』の監督です。映画の中に、今は取り壊されてしまった世田谷の家（応接間と書斎は旭川市の井上靖記念館に移築）と軽井沢の別荘が登場し、井上家にとっては思い出深い建物を美しい映像で残していただきました。

そして新理事にはソウルオリンピック女子柔道銅メダリストの北田典子氏。靖が設立に関わり、多くのメダリストを輩出した柔道の私塾「講道学舎」の最後の塾長であり、大学で教鞭を執る傍ら女子柔道選手の育成をしておられます。お二方とも靖とはとても縁が深く、心強いお仲間が増えたことを喜んでおります。

最後に、皆様の温かいご協力に感謝を申し上げ、引き続きよろしくお願いいたします。

令和六年十二月吉日

# 井上靖はなぜ、匈奴に惹かれたのか

『明妃曲』を読む

重里徹也（聖徳大学特任教授）

井上靖はなぜ、匈奴きょうとに惹かれたのか。少し丁寧に言い換えれば、井上靖は匈奴に何を思い、なぜ、それにまつわる物語を表現しようとしたのか。匈奴に一体、何を託したのか。そして、その背景に何があったのか。

これは興味深い問いだ。井上以外にも、北方の遊牧民族に惹かれる第二次世界大戦後の日本人作家は少なくない。彼らを魅惑したものは何なのだろうか。井上はそのモデルケースにもなるのではないか。

匈奴とは『大辞林』（第三版、三省堂、二〇〇六年十月）によると「中国、秦・漢代、モンゴル高原に活躍した遊牧騎馬民族。紀元前三世紀の末、冒頓ぼくとん単于が諸部族を統一して北アジア最初の遊牧国家を建設、最盛期を迎えたが、漢の武帝のたびたびの征討で衰え、紀

元後一世紀南北に分裂。（後略）」とある。遊牧民をさすこともあるし、彼らによって建てられた遊牧民国家をさすこともあるようだ。中国は争ったり、和平状態になったりしながら、この異民族と接してきた。

今夏（二〇二四年夏）の井上靖研究会で、南京大学の劉東波が井上の短編『明妃曲』を中心に発表した。それを機に何度か、この作品を読み直したのだが、冒頭の問いを考えるうえでも、随分と興味深い作品のように思う。井上がなぜ、匈奴に興味を持ったのか、その答えが示されているように思ったのだ。

『明妃曲』は一九六三（昭和三十八）年二月一日発行の『オール読物』新春特大号に掲載された。一九〇七年生まれの井上靖が五十六歳になる年だ。

作品の舞台になっている時代は、「私」が大学を出た年に大陸の戦争が新しく起こった、と作品の末尾近くで明示されている。この戦争とは日中戦争（一九三七～一九四五年）のことと考えられる。小説はその前の時代、つまり一九三〇年代の半ば前後（昭和十年前後）を描いているといえるだろう。

『明妃曲』の主な登場人物は二人。

一人は物語の語り手である「私」だ。大学生だが、学校にはほとんど出ない怠惰な哲学科の学生で、単位が取れておらず、いつ卒業できるかもわからない。学業にも興味を失っているが、卒業して出ていく社会にも何の期待も持っていないかった。そんな虚無的な内面を埋めるものが匈奴への興味だった。匈奴に憑かれていたと表現される。といっても、それは学者の研究とは違って、興味の持ち方は甚だ自分勝手に、知識の漁り方も体系だっておらず、放埒で気儘だったと自認する。「私」は自分自身の興味の持ち方を「頗る匈奴的だった」と述懐する。

もう一人は「田津岡竜英」だ。「私」より三、四歳年

長。「私」が籍を置く大学の図書館の事務員だ。彼も匈奴に憑かれた人物だった。田津岡に特徴的なことを二つ挙げよう。一つは大学を出ていないことだ。独学の入だ。我流に匈奴について調べている。そして、貧相な外見も特徴に数えていいだろう。本文中では「ひどく貧相なほんのひと握り程しかない体軀を持ち、従って甚だ風采が上がらぬ非力な彼」と描かれる。

小説はこの二人のやりとりを通して進行する。二人が知り合うようになったのは、「年の瀬も押し詰まった十二月の二十日過ぎのある夜」だった。場所は大学の近くのおでん屋。二人は「私」が図書館で借りた本をきっかけに王昭君について語り合う。

王昭君とは中国・前漢の武帝の時代の官女。『大辞林』では次のように記述されている。

中国、漢の武帝の後宮の美女。（中略）紀元前三三年、匈奴の王、呼韓邪こかんや単于が漢の武帝の王女を妻に求めたとき、親和政策により王女の身がわりとして嫁がせられ、その地で死んだ。後世、元曲「漢

「宮秋」などにうたわれた。生没年未詳。

ドラマティックな生涯を送ったと考えられるが、史料は少ない。多くの詩や戯曲、伝説や絵画の題材になっている。王昭君の「昭」の字は後代忌まれて、「明妃」と呼ばれたと小説『明妃曲』には書かれている。これは引かかる記述なので、後で触れよう。

小説はこの後、この明妃の人物像をめぐって、「私」と田津岡が何度か会って会話をする中で、物語が動いていく。明妃とはどういう女性だったのか、明妃の人生をめぐる真相はどういうものなのか、歴史ミステリーのように読者の興味を惹き付ける<sup>\*</sup>。

ここでは、この小説を考えるポイントを三つ設定しよう。

まず、第一に「私」と田津岡の関係は何を意味しているのか、という問題だ。これについては興味深い記述がある。「私」はなぜ、匈奴というものの「ファン」になったのか。どこに魅力を感じたのか。

そのことを私に教えてくれたのは、他ならぬ田津岡竜英である。(中略) 彼が、一種の情熱を以て匈奴のことを語るのを聞いている時、私はふと自分が匈奴に惹かれる秘密に思い当たったのである。

つまり、田津岡とは、「私」にとって、鏡に映った自身のような存在だった。田津岡の匈奴に対する情熱が、自画像を見るように「私」の匈奴に対する情熱のありようを「私」に思い知らせた。匈奴に対して、田津岡は「私」にとって精神的な分身(ドッペルゲンガー)のようなものだと考えられるだろう。

小説では二人の共通点を明快に提示している。「私も田津岡も、自分の内部にも外部にも、鎗矢で射なければならぬものを沢山持っている人間であった」「有体に言えば無能で、怠惰で、希望がなく、絶えず周囲に引け目を感じている」「そのくせどこから根ざして来るかほとんど判らぬ自尊心だけを護符のように後生大事に持っている」と描かれる。

そんな「私」と田津岡にとって、匈奴は正反対のもの

を持っていて。単純さ、殺伐さ、精悍なところ、非情なところ、実利的なところ、近代道徳では律しられない行動。そんなふうに「私」は匈奴の魅力を挙げていく。つまり、日常の枠組みの外にいる存在といえはいいか。外から内を脅かす異物といえはいいか。「私」と田津岡は精神の双子のように似ており、二人とも、そんな匈奴に見果てぬ夢を見てあこがれた。

二人は共通して小さな眼をしていて、その底に得体の知れない自尊心が光っていた。それは二人の心のありようを端的に示すものだろう。つまり、彼らのチマチマした日常を超えて、ある種、圧倒的なパワーや生命力のようなものを匈奴に感じ、二人ともそれに心酔していたのだ。それに同化したと願っていたといってもいい。匈奴は彼らの心の空虚を満たすものだった。目的のみつからない彼らの人生をかううじて意味づけるものだった。

ポイントの二つ目は、この小説がたどり着いた明妃

の肖像である。

この作品によると、これまでに物語や芝居で描かれた明妃は、いろいろなバリエーションがあるが、いずれも悲劇のヒロインだった。中国から匈奴の主君に与えられた美女が自分の身をはかなくて、国境近くの河に身を投げたというものが代表だろうか。これは『元曲集』に収録されている馬致遠の戯曲『漢宮秋』によるものだという。自分の身をささげて漢の国を救った愛国の女性という側面も持っている。

田津岡はこれを「全然つまらなかつた」「何もかも(嘘です)」と全否定する。そのうえで、新しい史料がみつかり、明妃の本当の姿がわかったという。小説の後半で力点が置かれているのは、この「新しい史料」に記されていた明妃の姿である。

二人が二回目に出会ったのは、やはり件のおでん屋で、田津岡は「私」に新しい史料に描かれている明妃像を語る。史料にまつわるノートは家に置いているので、思い出すままに自分流に話す、という。「私」は田津岡の話は創作に違いないと断定しながら、その話には惹か

れていく。

田津岡の話が描き出した明妃とは、こういう女性だ。美貌で知られ、前漢の元帝の後宮に入った。しかし、経緯があつて、なかなか元帝の寵を得ることはなかった。匈奴の使者の接待に駆り出された時に、この使者に強く惹かれた。この若い使者は匈奴の君主の第一子だった。そのうちに明妃は遅ればせながら元帝の寵愛を受けることになった。明妃は元帝を憎み、匈奴の若者を愛した。十年もほつたらかした元帝が憎い一方、匈奴の若者にはその烈しい眼で見つめられ、恐怖とともにその姿が強く心身に刻まれたからだろう。

明妃が元帝の寵愛を受けるようになってから一カ月後、匈奴の君主から使者がきて、明妃を妃として頂戴したいという。明妃は老君主に嫁ぐことを知り、悲観して黒河に身を投げたが、助かった。そして、自分が愛する若者が、父は老いている、まもなくして死ぬば自分の妻になれ、もし何年も父が生きるようなら、私が父を殺す、と約束する。翌年、老君主は病死し、明妃は晴れて自分が恋した男に嫁ぐ。明妃は漢に帰る機

会があつたが、帰らなかつた。

田津岡の話は明妃の肖像を大きく変えている。悲劇の愛国ヒロインではなく、窮屈な漢の宮廷生活から脱出して、恋した相手の匈奴の若者と一緒になる、ある種のハッピーなサクセス・ストーリーになっているのだ。「私」はこの田津岡の創作と美しい明妃像に魅力を感じ、田津岡にも親しみのようなものを覚える。

なぜ、二人は新しい明妃像に惹かれたのか。それは閉塞した生活から脱出して、愛する遊牧民とともに平原を駆けまわる女性に解放感と自由を感じたからだろう。元帝のもとの生活は、明妃にとっては、物質的には恵まれているかもしれないが、体のいい奴隷か捕虜のような生活だった。「私」と田津岡にとつても、日常は居場所のない孤独で退屈なもので、そこから抜け出して、自由に飛翔する夢を明妃に重ねたのではないだろうか。

この小説について考えるポイントの三つ目として、

元号の問題を挙げておきたい。

王昭君はなぜ、明妃と呼ばれるか。「昭」の字が忌み嫌われたからだという。このことから、作者が「昭和」に対する否定的な気持ちここに重ねたという解釈もあるいは成り立つだろうか。一方で、明妃の「明」は「明治」の「明」である。この物語は昭和を否定して、明治を肯定していると読むのは、うがち過ぎだろうか。「昭和」には二つの時代が重ねられていると読める。

一つは小説の舞台になっている、日中戦争前夜から第二次世界大戦へと流れていく昭和。軍部の抑圧が進んでいき、やがて国が破滅を迎える昭和だ。人々は戦時下に何を感じていただろう。もう一つは、この小説が書かれた東京オリンピック前前後の昭和。アメリカの庇護と支配のもと、高度経済成長に邁進していた昭和だ。日本人は衣食住を満たすために懸命に働き、奔走した。その間に失ったものがあつたのか、どうか。そんな昭和だ。

『明妃曲』という興味深い短編小説について、推測を

交えて、勝手気儘な雑文を書いてしまった。読者諸氏には、これも匈奴的な文章と笑っていただければ、ありがたい。

\*1 『明妃曲』のミステリー性と発表当時の出版状況に注目した論考として、何志勇「一九六〇年代における井上靖の中国関係歴史小説の大衆性——大衆雑誌との関係を視座に」(『城西国際大学日本研究センター紀要』六号、二〇一一年)がある。

〔付記〕『明妃曲』の引用はすべて『井上靖全集』第六卷(新潮社、一九九五年十月)によった。



## 第七回 井上靖記念文化賞

石内都氏・安彦良和氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人または団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しまし

た。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯にわたり各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第七回井上靖記念文化賞の選考委員会は、令和六年二月十七日に東京都内にて、贈呈式は、令和六年五月十八日にアートホテル旭川（北海道旭川市）にて行われました。

### 第七回 井上靖記念文化賞

石内都 写真家

写真家

贈賞理由

石内都氏は一九七〇年代末に、自らが育った横須賀の写真シリーズによって脚光を浴びて以来、記憶をテーマにした独自の表現の可能性を切り開いてきた。

母が身に着けていた衣装を撮った「Mother's」のシリーズや広島原爆記念館の遺品をモチーフにしたシ



リーズは、身体的、生理的な感覚と鋭敏な批評精神を一体化させた世界として高く評価されている。

受賞のことは

横須賀から「ひろしま」へ 私写真と戦後史

受賞のお知らせをいただき、その理由と共に改めて写真について考える機会をありがとうございます。

写真は文学と違い見るといふ身体的行為から成り立っています。写真を見ることは簡単そうに思われますが、実は文章の行間と同じような意味合いがあり、写されている画像の周辺や奥行、その裏側に表面をつらぬいた目に見えない内容があるのではないかと考えました。たとえば空気や匂い、音や時間、そして闇などを写真に表現出来るかもしれないと思いつきながら写真を撮っています。

個人的問題意識と個人史そのものから生まれた「絶唱、横須賀ストーリー」は、第一次ベビーブーマーからアメリカ海軍基地横須賀で過ごした思春期の痛みを

外在化する為に、横須賀を印画紙の上に吐き出すような写真だったので。それらはいわゆるドキュメンタリーとはほど遠い、あくまでも創作としての写真でした。

しかしいくら私写真の創作と言っても写真は自分の外側、外界、社会、あるいは世界の現在しか撮ることが出来ません。過去は撮れないのです。常に目の前に存る、今しか写すことが出来ない。そんな中で「ひろしま」は始まりました。私写真が戦後史と融合したように感じられたのです。

原爆資料館に毎年被爆した人の遺品が届けられている事は知られていません。私と二つ違いの終戦の、その後は今でも続いています。旭川で「ひろしま」の話が出来るのはとてもうれいしいです。今年も「ひろしま」を撮りに行ってきます。

#### 活動の概要

一九四七年群馬県桐生市生まれ。横須賀で育つ。多摩美術大学デザイン科織コース中退。

- 二〇一四年 ハッセルブラッド国際写真賞
- 二〇一六年 写真集『フリーダ 愛と痛み』岩波書店
- エッセイ集『写真関係』筑摩書房
- 二〇一三年 朝日賞

#### 選評 記憶のインカネーション

建畠 哲

石内都は自らが生まれ育った横須賀をテーマにしたシリーズ「絶唱、横須賀ストーリー」（一九七八年）で脚光を浴びて以来、記憶をテーマにした独自の写真表現の領域を切り開いており、早くも七九年には《APARTMENT》で新人の登竜門として知られる木村伊平衛写真賞を受賞している。

たとえば「Mother's」(二〇〇五年)。同年のヴェネチア・ビエンナーレの日本館のアーティストに選ばれた石内はこのシリーズを出品している。母の衣服や化粧品などをモチーフにしたものだが、衣装の多くは自宅の窓ガラスに貼り、庭が映らないように外側にトレーシングペーパーを当ててから撮影されている。彼女はそれを

独学で写真を始める。一九七七年「絶唱、横須賀ストーリー」で初個展を開催。

現在も継続している代表的なシリーズ「ひろしま」では、被爆した方々の衣服や日用品を光や配置を熟考して写し取り、持ち主であった個々の人間をそこに反映させている。ほかにも、建物、体に残る傷跡、フリーダ・カーロや母の遺品などを撮ることで、目に見えない「時間」を写真に写し込む試みを行っている。

#### 主な著書・受賞歴

- 一九七八年 写真集『APARTMENT』写真通信社（木村伊兵衛写真賞）
- 一九九三年 エッセイ集『モノクローム』筑摩書房
- 二〇〇五年 エッセイ集『ギズアト』日本文教出版
- ヴェネチア・ビエンナーレ写真展
- 『マザーズ 2000-2005 未来の刻印』淡交社
- 二〇〇八年 写真集『ひろしま』集英社（毎日芸術賞）
- 二〇一三年 紫綬褒章

自然のライトボックスというが、衣服をいわゆる放射光ではなく透過光によって撮影するという特殊といえば特殊な方法は、もちろんデジタルな意図もあるに違いないが、あえていうならば母が身につけていた遺品に宿っているインティメートな時間、消え去り行かぬ記憶を、そこを透過する光のうちに捉えようとしているのではなからうか。彼女にとって写真とは時間の一瞬を制止させる、凝固させるのではなく、むしろそれを蘇生させるものなのである。

彼女自身がライフワークと称する広島原爆記念館の遺品を撮影した「ひろしま」のシリーズでは、被爆者の衣服は文字通りの人工光線のライトボックスに載せて撮影されている。それらの作品もまた彼女のカメラが蘇えらせる記憶であるだろう。身体的、生理的といってもよいプライベートな感覚と歴史的、社会的な批評精神とが一体化した石内都の世界は、いま顕彰されるにふさわしいと思われる。

## 安彦良和（やすひこ・よしかず）

漫画家

## 贈賞理由

安彦良和氏は日本を代表する漫画家、アニメ製作者として知られている。『機動戦士ガンダム』の名を聞いたことのない日本人は少ないだろう。だが、氏の功績はそこに留まらない。『虹色のトロッキー』で近代日本の闇を、『ヤマトタケル』や『ナムジ』では古代、ある



たしか帝国ホテルだったかの会場の隅にいたのだが、壇上に立たれた井上先生のお姿を文字通り遠望した。その距離は、先生と僕の存在の間の距離にまったくふさわしいものだった。そんなに遠い所から今回お声が届けられた。光栄というしかない。

文学界が私小説に逼塞していく中で、井上先生は対象を汎く異界にまで求められた。漫画という軽い文化に身を置く者とはその在り様は無論較べるべくもないが、古今東西に対象を求めて悪戦する姿にエールが送られるのならこれ以上の励ましはない。これからの仕事の無上の糧とさせていただく。

## 活動の概要

漫画家、アニメーター、アニメ監督。一九四七年北海道紋別郡遠軽町生まれ。弘前大学人文学部西洋史学科除籍（退学）。

一九七〇年虫プロダクションに入社し一九七三年からはフリーのアニメ作家として活躍。『勇者ライディーン』『機動戦士ガンダム』などを手掛ける。

いは神代の日本を描き、マンガの世界に新しい領土を切り開いたパイオニアである。

受賞のことは

遥かに遠くからの…

一本のラジオドラマの遠い記憶がある。貧しい山の家の夜、寢床の中で体をこわばらせて聴いたのだ。題名はたしか『洪水』というのだったと調べてみるとすぐに判った。文庫版『楼蘭』の中の一編で、読みかえずと遙かな記憶が甦った。ラジオが娯楽の王者だったその頃は、ラジオドラマが元氣だった。「架空実況放送」なんていうのもあって、アナウンサーが声を嗶らして「関ヶ原合戦現場から」の中継をやったりもしていた。『洪水』もたぶん巧みな効果音を駆使した上出来のドラマだったのだろう。

作者の井上靖先生の名も僕からは遠かった。大作映画『敦煌』の制作が某出版社の正月パーティーの場で発表された時、たまたま出入りを許されていた僕は、

一九七九年『アリオン』で漫画家デビュー。古代日本に題材をとった『ナムジ』『神武』『ヤマトタケル』、明治以降の近現代史の裏面を描いた『虹色のトロッキー』『王道の狗』、西洋史が舞台の『ジャンヌ』『イエス』『我が名はネロ』など著書多数。代表作『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』は累計一千万部を超える大ヒットとなった。クオリティの高い作画で多様な登場人物をリアルに描き、様々な分野のクリエイターに影響を与えている。

二〇〇六年から二〇一五年、神戸芸術工科大学メディア表現学科教授。

## 主な受賞歴

一九八一年 星雲賞（アート部門）

一九九〇年 日本漫画家協会賞優秀賞『ナムジ』

二〇〇〇年 文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞『王道の狗』

二〇一二年 星雲賞（コミック部門）『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』

△ THE ORIGIN』

- 二〇一五年 アニメーション神戸賞特別賞
- 二〇二一年 日本アカデミー賞協会特別賞
- 二〇二二年 文化庁映画賞（映画功労部門）

選評 この国の文化を代表する 高橋源一郎

海外に出て「知っている日本の文化は？」と問いかけると、まず口にはのぼるのはアニメーションとマンガ（漫画）だろう。他のどんな文化も、いまはその名声には及ばないのである。安彦良和氏は、そんな、この国のアニメーションとマンガのいずれの分野においても大きな貢献をしてきた。

安彦氏は、ふたつの分野をほぼ独力で築き上げた偉大な創始者・手塚治虫が率いた「(旧) 虫プロダクション」の養成所からキャリアをスタートさせた。だから、我々は安彦氏を手塚治虫の正統な後継者と呼ぶべきなのかもしれない。「虫プロ」倒産後、安彦氏は、フリーのアニメーターとしてさまざまな作品に参加した。そのうちもつとも有名なものは、安彦氏がキャラクター

#### 井上靖記念文化賞・歴代受賞者

##### 第一回受賞者

- 菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）
- 小田 豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

##### 第二回受賞者

- 芳賀 徹（東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授）
- 織田憲嗣（東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター）

##### 第三回受賞者

- 大城立裕（作家）
- 伊藤一彦（歌人・若山牧水記念文学館館長）

##### 第四回受賞者

- 宮本 輝（作家）
- 岡野弘彦（歌人・國學院大學名誉教授）

デザインと作画監督を担当した『機動戦士ガンダム』だろう。「戦争」をテーマに、「ロボット」を「モデルスーツ」と呼ばれる兵器にした、この独自の物語様式は、その後のアニメの世界における、一つの重要なジャンルにまで成長することになったのである。

やがて、アニメーターとしての仕事を離れた安彦氏は、専業マンガ家としての活動を開始する。安彦氏は、マンガ家として、『ナムジ』や『ヤマトタケル』ではこの国の古代や神話の世界を、『虹色のトロッキー』では昭和の初期の満州を主な舞台として、近代の闇を描いた。共通するのは、この国の「歴史」への深い関心であった。

思えば、井上靖の作品にも、「戦争」の影が差し、「歴史」への尋常ではない強い思いがくり返し表れていた。安彦氏ほど、井上靖の名前を冠した賞の受賞者にふさわしい人はいない。わたしはそう確信している。

##### 第五回受賞者

- 熊川哲也（バレエダンサー・Kバレエカンパニー芸術監督）
- 藤原良雄（株式会社藤原書店代表取締役社長）

##### 第六回受賞者

- 吉増剛造（詩人）
- 山本ひろ子（和光大学名誉教授・私塾「成城寺小屋講座」代表）

#### 井上靖記念文化賞・選考委員会委員

- 川村 湊（文芸評論家・法政大学名誉教授）
- 栗原小卷（女優・日本中国文化交流協会副会長）
- 高橋源一郎（作家）
- 建畠 哲（美術評論家・詩人・埼玉県立近代美術館館長）
- 伴野昭人（北海道新聞社文化部長（当時））

（五十音順）

## 終戦前後日記

③

一九四四年二月一日～八月二十四日

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

一九四〇年一月十六日から一九四六年四月四日までの日記帳三冊の紹介を進めています。日記には、戦時下という特殊な状況に翻弄されながらも、美術・宗教欄担当の記者として東奔西走する様子が書き留められています。

連載第九回では一九四四年二月一日～八月二十四日の期間を公開します。本土にも空襲が始まり、いよいよ戦時の色合いが濃くなる中、仕事や読書についての記述は減り、関心は食料や物資の調達に移っていきます。折り悪く次男の入院が重なったことで一家は離れて暮らすことになり、そのような状況に心を痛める様子がうかがえます。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れなどについては、断りなく直しました。今日の人権意識からすると不適切な表現がありますが、時代背景を考慮しそのままとしました。

(昭和十九年)

二・一 四時より小林君の神戸の社にゆく。神戸元町前で特別定食を御馳走になる。事変前でも一寸たべられぬうまいもの、主人が変人で一見では入れぬ由。

二・二 鳥飼君と四時に社を出る。「橋本」関雪の富士を見て貰ひ乍ら夕食を御馳走。野菜鍋の他何もないが、珈琲、紅茶、クヅ湯等、時節柄致し方なし。十時まで愉快に話し、提灯つけて送る。

二・三 五時より小林君宅のお招かれ。スキ焼、三十円の鶏二羽。腹いっぱい喰べる。小谷〔闘牛〕の津上のモデル〔上田長太郎〕。小谷正〔小谷正〕君は上田長さんの「童心開眼」の会〔「童心開眼」が一九四三年十一月に刊行されている〕で不参、經濟部の□□〔二字〕君と二人がお客、十一時、下駄二足お土産に貰つて帰る。昼、社に野間〔宏〕君軍服で来る。一年振り、相変らず。

明日結婚式なので来てくれといふ。承諾。

二・四 四時の約束なのであはただしく阪和沿線の野間君のお嫁さんの家、つまり富士正晴君の家にゆく。野間君側では、野間君の、母、おばあさん、その他では自分だけ。六時頃、京都の三高の高安国世君〔仲人〕の来るのを待つて二階の座敷で式、来客といへば僕だけ、さゝやかだがいい結婚式。いろいろ御馳走が出る。スキ焼も出れば、羊羹もある。十時、辞す。天王寺まで高安君夫妻と一緒にバスで出掛け、そこで別れる。明日、上京するので大変あはただしい。

二・五 夜九時三十分の急行で三島に向ふ。杜忙しく土産をととのへる暇なし。千葉賞レリーフ、印象さんの「流転挿絵集」〔井上は「流転」で千葉亀雄賞第一席入選を果たし、雑誌掲載時の挿絵を堂本印象が担当〕、玉章と松菊の軸——これだけ重い大きい荷物になる、夜食の弁当とお茶持参、汽車は大阪発なのでどうにか座れる。四時間程眠る。

二・六 五時沼津着、富士真白で美し。沼津より電車で三島に向ふ、この電車もさすがに工員たちで早朝

なの立錐の余地なし。静子〔石川静子〕宅で朝食、大阪から来ると喰べ物が豊富で驚く。昼はお薪の御馳走になる。午後母〔実母〕来る。いろいろ喰べ物を揃へて持つて来てくれる。夜おそくまで話す。

二・七 十二時の汽車で上京、横浜で電車に乗換、二時、大森着、駅前電話を大伴〔四高柔道部時代〕宅にかけ、女中さんに荷物をとりに来て貰ふ。直ぐ上野にゆき、上京の目的たる芸術院会員の献艦画展をみる。印象に残る作品なし。四時閉館と同時に追出され、上野の高台のテニス・コートか何かの傍で、三島より持つて来た昼食の弁当を開く。寒し。六時大森の大伴宅にゆく。いろいろ飲待される。久し振りで高校時代の気分になる。一時頃まで喋る。

二・八 朝十時起床、大伴も自分も一眠り。朝おはぎの御馳走になる。昨日野菜を持つて来た鞆に、土産をいっぱい詰めて貰ふ。砂糖、海苔、フィルム、薬品、シロップ、脱脂綿、ガーゼ等々。四時三島着。静子と

難し。敵トラック島に来襲、撃退せるもわが方損害甚し。輸送船十三隻、飛行機百四十機、巡洋船、駆逐艦等五隻失ふ。漸く国難の感じ国民の面上に漂ふ。

二・二二 土曜日紀州木本の竹本君〔毎日新聞社熊野竹本を訪ねるつもり。そのため記事(統合版)の書きだめをせねばならず、久しぶりに忙し、図書館にゆき頭の悪い館長の話をきく。六時、和田女史を誘ひ食事に出たが、どこも休業、一軒だけ角の末広が開いてゐるが、物凄い列、結極やめて帰る。社の清掃のオッサンより洋傘、大人物五十三円、子供物十二円也。

二・二三 二時出社、静子、大谷〔妻ふみの末妹〕、永井さん、野間君等のお使物を探しに高島屋へ行く、高い上にひどいもので一物も買はず、マーシャル玉碎八千の由、心暗し。七時半まで社で仕事、夕食券を貰つてなかつたので空腹甚し。竹本君よりの電話で今度の土曜は都合悪しとのこと、木本行一時見合せることにする。

母が昨日詰めておいてくれた行李を、杉浦の自転車にのせて駅でチツキ〔鉄道で旅客が託送する手荷物〕にしてくる。重いので断られるかと心配したが無事通過。十時の汽車で三島を立つ。ガタ／＼の上に物凄い混雑、名古屋まで立ちづめ、ひどく疲れる。京都近くになり眠り、眼がさめると大阪駅、あはて、下車、土産の荷持重し。午後出社。茨木の家も久しぶり物資豊富なり。

二・九―廿一 雑事多く日記つける暇なし。鳥飼君の世話で関雪の富士を二千七百円で売る。大体借金の整理できる。このうち千円を関雪に払ひ小品二点を貰ふ。二千円位で手離すつもり。質屋三百五十円、伊豆と三島へ百五十円、宴会借出返却百円、保険二百円、使物二百円、炭百四十円等々の仕払。会社の先借、大口掛等のけて丁度予備として二百円程残る。辻さんの所より炭一俵貰つてくる。翌日奥さん礼に来て恐縮する。福井より申込みの半分、アメ四十八個到着。仕末が大変なり、大部分壊れてゐる、併しこの際甘いもの入ることは有

二・二四 京都へ堂本さんの絵を取りにゆく。伊豆行の静子へのお土産買ひに大丸によるが一物もなし。野間君の結婚式のお祝バックル(十五円)購入。雪が降り初めた中を電車で衣笠山にゆく。電車の便悪くうんざりする。帰りは勘違ひして西大路四条より七条まで氷雨の中を歩く。社へ五時、記事の書きだめで九時まで仕事、ひどく疲れる。家へ帰って暖い紅茶美味し。

二・二五 今日午後四時クエゼリン、ルオット両島守備隊の発表ある筈なので、発表後二三日の振鈴〔毎日新聞の読者投稿欄〕記事をつくる。「莫煩惱」「英霊につゞけ」等を書いてゐて、次第に興奮してくる。一億祖国の運命を考へる時代、長い歴史の上でも、元寇前後以来なかつたことだらう。クエゼリンの勇士たちの如く、自分も亦最後の一人になつても戦ふ覚悟ができてゐる。六千五百の英霊(発表)。仕事山のやうにあるのに出社二時半。京都の春芳堂(表具店)が高石会長の関雪の画を受取りにくるといふ電話来てゐるので一時間程待つ、

あはたゞし。関雪小品二点、小林啓三君に見せるつもりで持参したので、春芳堂の人にみて貰ふ。一本千五百円位かといふ。愕く。携行して貰つて確かなところを見て貰ふことにする。三時半少年審判所長の記事、それから図書館で読書欄記事を明日までに書いて貰ふことを依頼。大急ぎで阪急に行き、幾世(長女)と都子(長姉・石川)のレイン・コート、石川の小さい女の子(次女の「長女」)の帽子等を買ふ。居残り九時まで。帰宅後明日の支度。ふみ(妻)も二時までアイロン掛けやら弁当作り。爆撃時の心構へ等について話し合ふ。辻氏へ先日奥さんに来て貰つた礼状。竹本君に木本行無期延期の報せ。野間君にお祝ひの品と手紙——一日忙しかつたが、これで物とする。(車中にて)

二・二六 八時発の特急にのるので六時起床、子供たちもみんな起きる。汽車一時間延着。京都より腰かける。同じ車中に京都の臼井崑之助君のつてゐる。沼津よりバス、五時石川宅着。明さん(静子の「静子の夫」)熱海にゐるので来れるかも知れぬといふので電話かけたが、忙

らぬといふ。藤井(沼津中学時代の友人・藤井壽雄)を訪ね、夕食を御馳走になる。ビール四本、大分酔つぱらふ。話題怠窟なり。十一時、藤井に駅まで送つて貰ひ、電車で三島に帰る。帰宅後、夕食をたべ直し、静子に手伝つて貰ひ荷作り。一つく目方を計り、七貫二百匁の野菜を、昼間買った竹行李につめる。行李だと衣類をつめて八貫目、野菜だとコモ包みにして四貫目、しかも薩摩、小芋、薩摩切干の類は送られぬ規定。従つて徹底的に規則違反なので心配だがつめてしまふ。人参、大根、牛蒡、切干、メザシ、葱等、問宮から貰つた味噌、米、メザシも入れる。竹行李がひどいので手荒くすると壊れそうだ。

二・二八 九時まで眠る。十一時廿四分沼津発急行にのる予定なので大特急で出立の支度。出立間際になつて腕車(人力車)ないといふので、杉浦より自転車借りてチツキにする行李を駅まで運ぶ。行李無事返送、大急ぎで自転車をおきに帰り鞆を持つて再び三島駅に向ふ、ウナギ十円、卵八円(二十個)、出掛けて静子

しくて来れぬさう。夜いろく静子と話し、十一時間宮(父方の伯母・宇米の婚家で、沼津中時代に下宿。自伝小説の真門家)の二階に寝る。大分こちらの方が京阪地方より暖し。湯婆なしでも暖い。

二・二七 八時起床、午前中炬燵に当つてゐる。静子買物に走り歩き野菜物等を集めてくれる。午後一時より静子礼装で加陽宮様(賀陽宮恒憲か)に御挨拶にゆく、自分も一緒に明さんに会ひにゆく。静子式服でコートの下より裾模様が見え、行先きが熱海なので時局不認識の有閑階級に見られはせんかと思つたが、出てみるとその心配なし。三島よりもう一層熱海はのんびりしてゐる。戦闘帽寥々たるもの、大阪とひどい違ひなし、陽気も暖く春めいてゐるが、それより食物のあるなしが人の表情まで変へてゐるのだ。こちらで思ふと大阪は実に街全体が辛い表情だ。宮様の宿舍の応接間、明さんの宿舍と各三十分位おづづ話す。宮様は御散歩中。帰途、ばつたり出会ふ。あはて、外套を脱ぎ御挨拶申上げる。帰へりは静子と別れて、沼津へ行き、急行券を買ふ予定だつたが、時間がおそく明日でなくては売

が入手してくれる。沼津藤井宅へ行くと十二時廿四分の急行券を購入しておいてくれる。一時間予定が狂ひ時間ができる。駅前の食堂で食事。後町をぶらつく。汽車は二等ガラ空き、寝台車の座席で名古屋まで裕々とゆく。名古屋から普通の二等車に代る。谷崎(潤一郎)の「聞書抄」を読了、後半つまらなし。七時五十分京都着。

九時前家に着く。

二・二九 久しぶりで食糧豊富なので今夜は卓也(次男)のお喰初めのお祝ひをやることにする。社にて一日なすなし。帰路子供たちに玩具を買ふ、修一(長男)の汽車十一円余、昔ならせいぐ二円程度のもの。乳の配達、徴用で呉にゆき三月より配達できぬ由にて大恐慌を来す。乳屋の配達と集金に来たお内儀さんに自転車をゆずつてくれるやう交渉する。

三・一 十時まで眠る。乳屋の配達空ビンを取りに来て、昼頃自転車を見に来いといふ。十二時一寸前家

を出る。思ったよりいゝ自転車、主人不在なので確定しないが取りあへず借りて来る。歩くと二十五分かゝるが、自転車だと十分位。結局二時出社、統合版の打合せ会。夜、野菜と鰻、いづれも少々持つて辻氏宅を見舞ふ。今日再手術した由、闇の石家も悲鳴上げてゐる。野菜も配給一物もないといふ。九時辞去。

三・二 寝汗かく、湯婆で熱かつたのかも知れぬ。少し気になる。自転車で乳をとりに行く。途中でパンクし自転車屋に持つてゆく。前輪は新しいが後輪は大分修繕してあるので夏は使へないといふ。併し朝晩半時間位なら多分大丈夫ならんとのこと。乳屋にゆき五十円おいてくる。十二時出社、脊中少し痛し。桜橋トンカツで三十分以上待つて夕食、一円三十銭で情ない食物、社で二度目の食事、居残り。急に各社夕刊廃止を申渡された由。社内なんとなく物々し。九時帰宅、三度目の食事。朝お雛さんの軸をかける。

三・三 自転車で乳をとりに行く、一時出社、夕刊

三・六 自転車毎朝パンクしてゐるのはやり切れぬ。乳屋に行く途中自転車屋で、タイヤを修繕して貰ふ。

タイヤ払底の折、パンクの修理夥し。三十分程自転車屋にゐる間に数人来る。この他二、三十台たまつてゐる。乳屋のお内儀さんに自転車譲渡の値段を聞く、結局、手付けとして五十円おいてあるが、それだけでいゝといふ。まあこの位のところか。今日より夕刊なし。新聞社の前途も国の運命同様逆睹し難きものあり。次は朝刊半ペラになる日が来るだらう、そして大新聞の統合問題も起るだらう。文化欄は辛うじて残る。併し文化といふ欄の名は消える。「振鈴」、「建設」と改題。改題の挨拶を書く。寒し、久し振りで武藤金太氏と十五銭のスープといふ得体の知れぬものを飲みにゆき雑談。紅茶、珈琲はすっかり影を消した。帰りにオウスを買ひに行つたら公定の関係で、番茶もなくなることになる。樋口さんに替つて居残り。九時帰宅。武藤金太氏近くカキ料理屋を紹介するといふ。兵庫に一

廃止で社内も何かなし落着かず。七時帰宅、木本の竹本君より鯛沢山送つてくる。有難し。

三・四 夕刊廃止、今日の四日附が最後、振鈴を固めて掲載する。仕事紙面が解らぬので手につかず、四時帰宅、京都へゆく、伊豆より持つて来た鰻を父〔岳父・足立文太郎〕に少々。電車大変な人、久しぶりの雨、春雨にしては冷い。

三・五 午前中雨、春雨にしては粗い、寒し。午後雨が上つたので隣家の井戸より風呂の水をくむ。修一前を行つたり来たりして頗る邪魔なり。煙突を直したら二時間程で沸く。夜、昨夜大谷から貰つて来た豚肉で豚汁。久しぶりで美味しい。ふみ五杯たべる、物凄し。夜、幾世、修一を風呂に入れ十時就寝、日曜だが家事に追はれ一頁の読書もできぬ。木本の竹本君に御札に「聞書抄」「芋銭名画選」〔『芋銭子名作集』(一九四四年一月刊)か〕「先覚者伝」〔井上と浦上五六の共著『現代先』——三冊小包にして、手紙一本。〕

軒あるそうだ。家への土産にカキを持つてこれるといふので食指動く。

三・七 九時起床、一時出社。振鈴三回分。四時帰宅、七時より隣組、岡橋さんの組長の最後の常会、来月から蝦原さん。今度家が副組長になる、厄介なことなり。常会の通達事項貯金のこと許りなり。

三・八 修一を乗せて乳を買ひに行く。途中、小型貨物自動車と曲り角で衝突、壘も割れなければ修一も怪我なし。社で振鈴、四時社を出て武藤金太氏と兵庫にカキ料理を喰べに行く。お土産のカキを入れてくる容器を忘れたので、途中陶器屋で適当な容器を物色するがどれも高価なのでやめる。フライに、カキ鍋、他二品、お土産はカキフライの折詰、武藤氏の御馳走になる。武藤氏卵二個、レモン、ネーブル二個持参。十時帰宅、社で鳥飼君召集された挨拶に来る。澤木四方吉著「西洋美術集」下巻〔『西洋美術史研究』(一九三二年刊)か〕を貰ふ。

三・九 十二時出版社、鳥飼君のお饞別を、永松君と相談して、小林啓三君三人の連名で二十円呈上。召集多し。広告部の富田君陸に応召したことを聞き愕く。市場にゆき場長の話を記事にする。五時帰宅。  
経済部富田君も応召の由。

三・十 陸軍記念日、文化欄に小野十三郎氏の詩、相変らず底に一抹の憂愁を湛えてゐる。この人だけが或は日本の詩壇で自分を失はぬ人かも知れぬ。振鈴四編、一時半笠野半爾氏来社、五月刊行の「艦載機」の原稿四月十日までに持ちよる約束。芦屋に電話、今度の日曜に文与（ふみの長兄、足立千古の長男）に鱒と牛乳一升とりに行くよう伝える。電話を豊田氏、増井女史に聞かれ、両氏に一升づつ呈上することにする。相変らず応召者多し、内信の人で、いつか山口支局で写真を一緒にうつしたことがある人も応召の報せあり。

三・十一 「文友」の原稿を書くので木村素衛氏に会ふつもりだったが電話で日曜の方が都合いゝので、

い由、家を訪ねるといふ置手紙して既に居ない、内返の人にきくと半時間程前茨木に向つた由、再び急いで茨木に戻る。家へ帰り一分もたたぬうち竹本君来る、吻とする、新京阪の茨木駅に降りて探して来た由、よく解つたと思ふ。荷物社において来てある由なので、再びとりにゆく。その間、夕食の支度、家戦場の如し、七時再び竹本君を駅に迎ひにゆく。簡単だが精いつばいの御馳走。竹本君、どつさり土産持つて来てくれる。十二時過ぎまで話す。実にいゝ人だ。一日あまり忙しかつたので疲れたのか、寝汗かく。

三・十三 朝七時半起床。竹本君十時四十分の木本行きにのるといつて九時半家を出る。駅まで見送り家へ帰る。安藤の小母さん、伊豆へ家売つて帰る準備に、山本さんと二人で一応伊豆へ行つてみるといふ。十八日発つので、荷物あれば持つてゆく由。一時家を出る。暇なので、小笠原、樋口、石井の三同類項の面々と川のふちの喫茶店へお茶をのみにゆく。こゝの家は近く疎開させられる由、不味いスープすゝつて一

明日の日曜訪ねることにし、その分今日休み。十一時増井女史牛乳をとりに来る。サツマの粥で昼食、二時帰る。風呂焚き、二階の片付け、椅子直し等。福井にアメの外箱返送、氷雨の一日、自転車大いに役立つ。

三・十二 今日のは芦屋から誰か来るかも知れないので部屋の掃除、二階の片付け、十一時から京都の木村素衛氏に会ひにゆく。当てずつぼうに行つたので小松原で降りて少し探す。附近すでに春色をおび気持よし併し大気は冷し。木村氏午前中待つてゐたが、翼社の会に美術クラブに出掛けそこで待つてゐる由。仕方ないので河原町三条の美術クラブにゆく。十分程会つたが、原稿明朝書留で送る由。北野駅前でおウスと砂糖なしの小豆。えらいものを喰べさせる。京都駅前で昼食代りにオデン。三時半の大阪行きにのる。帰宅すると文与帰るところ。乳と野菜をかゝへてゐる。文与を送つて家へ上らうとすると、木本の竹本君来社の電報半時間程前に来た由、あはてゝ文与に追つき一緒に電車に社にゆく。竹本氏、六時間待つてゐたが音沙汰な

時間程くだらぬ雑談——勝手な時局話、戦争論、あいづち打つのが莫迦らしくなる。一日なすなし、六時帰宅。増井女史より一昨日のお礼に乾燥卵。

三・十四 暖い、すつかり春らしい。二時出版社、辻部長出版社してゐる。八分通り全快の由。加藤病院での手術をすゝめた手前、自分にも幾分の責任、といはざるも関り合ひがあるので、今まで少しは気になつてゐたがこれで吻とする。居残り、お茶を買つてくる。

永井君のお嬢さんの入学祝ひに弄具を阪急で買ふ、長い間気になつてゐたが、これもこれで気がすむ。荷物を伊豆に疎開することに決心する。河井寛次郎氏の茶碗、壺などを手始めとして、伊豆へゆく安藤の小母さんに持つて行つて貰ふことにする。幾世、綴り方「お父さん」「夢」「二年生」どれも割合に上手いのに驚く。

三・十五 お茶の整理、永井君の留守宅へ小包。二時出版社、振鈴を書いて、京都へゆく。関雪の絵を依頼

してある春芳堂の福島氏に結果をきくため。まだ名古屋より帰らぬ由、駅の電話で知り、引き返す。五時帰宅。夜、小林君の楠公展の原稿の準備。

三・十六 井上吉次郎氏の停年の会、八野井君の幹事で天満京阪前の「福助」といふ小料理屋。一晚買ひ切つただけに大変な御馳走、酒、ビール飲み切れぬ程ある。十一人で二百八十円、割に安い。平井君、樋口君大分酔つぱらつてゐる。井上吉次郎氏も嬉れしさう。この人には、五六年前実に嫌な面を見せられ、堪まらなく嫌な時もあったが、人生で最初に勤めた時の部長だけにやはり今となれば思ひ出も多く、離れてゐればいゝ人でもある。この人のお蔭で美術批評を書くやうにもなつたし、仏教も一通り解るやうになつた。その点は終生忘れられぬ恩義を受けてゐる。

三・十七 春芳堂の福島氏牛の絵を千円で名古屋で捌いてくれる。お礼百円。これで京都の九百円、社の大口八百円以外、借金全部払ひ、五万円程予備ができ

たらしい。豊田君と車で別れ、安藤に伊豆へやる荷物を託しにゆく。何かと自転車便利なり。河井寛次郎氏の壺、オウスの茶碗、セン茶碗二ヶ。他の物を送り度いが荷物になるのでやめる。一旦家に帰りて出社、振鈴二つ書いて五時半、社を出て、森田食堂により帰宅。ふみ胃の気分悪し。みんな早く寝る。楠公展の原稿。

三・二〇 ふみ気分悪く起きないので台所をやる。楠公展の原稿いそぐが何もできず。正午出社「建設」四篇。三時から小林君を望月氏に紹介するため美術館にゆく。絵、昨日の話はだめだつた由。三越の人に依頼する由。体疲れてゐる。

三・二一 彼岸の中日だが寒い。午前幾世を自転車にのせて散髪。竹本君に二十五日行くから鶏二羽手に入れておくやう速達。午後京都へ文化奉公会の座談会。大丸。てんでばらくで收拾つかぬ会、事業部松尾といふ人お喋りでうるさし。四時中座して、大谷さんに

た。実にさつぱりした気持なり。応召、応徴、その他急にお金の要ることができて差当り困ることなし。朝、修一を自転車の先きにのせて安藤へゆく。紅茶、切干しの御馳走になる。修一大悦び。木本の竹本君より先頃来阪の折の礼状、大変悦んでくれてゐる文面、こちらまで嬉れしくなる。

三・十八 小林君とお茶。預けてある絵捌ける由、有難い。楠公展の打合せ。四月より日曜ごとに当分小林君の会社にゆき応援を約す。小川君といふ小林君の片腕だつた人応召して小林君も大分参つてゐる。辻さんに阪急の樋口君の会にお招かれ。酒、ビール沢山出る。少し酔つぱらふ、帰宅すると芦屋の文与来てゐる。久しぶりでトランプのお相手。

三・十九 日曜、さすがに春らしく暖い。豊田君来るので何かと忙し。牛乳とりにゆき、部屋の掃除。豊田君、小供たちに玩具持つてくる。簡単な有り合せのもので昼食。ビール一本。それでも非常に気持よかつ

お墓詣り（生後六日で死亡した次女・加代が、東本願寺の東大谷墓地にあるふみの母方の墓に葬られている）。駅で省線切符買ふ人夥し、一時間以上並んでやつと入手。そのくせ電車はすいてゐる。要するに切符売り不慣れのため手間取ること夥し。それに一つの窓口に四五列以上も並び、混雑する。子供を連れては外出できぬ。夜、ふみと疎開の相談あれこれ。

三・二二 今日寒い。今年例年に比し春が遅い。午前、大伴に手紙。大学新聞、四高、日独文化へ送金、出社なすなし。夜久しぶりの風呂、気持よし。

三・二三 昨夜辻氏より電報、今日自動車が来ることに急に決まつたので手伝ひに来て貰ひたい由。十時家を出て西宮にゆく。自動車が後れて三時半来る。荷物多いが八分通り奥さんが箱に詰めてある。巴板額〔女傑の代名詞とされた女武将〕の如き精力家なり。二階の書物片附ける。くだらぬ書物多し。自動車の積込み二時間程かゝる。六時一旦家に帰り、再び荷物を降ろしに京都の転居先きの家へゆく。自動車来ないので空屋で雑談。十

時に辞去、後は随分大変だらうと同情に堪えぬが、泊り込んで手伝ふだけの熱意は起らぬ。疲れた。

三・二四 建設四篇。明日本本へゆくので書きだめ。夜一時過ぎまで明日の支度、ふみ弁当作りに忙しい。

三・二五 六時難波発なので、四時起床、四時半家を出る。省線も地下鉄も一番電車。乗客相に多し、旅客制限前の最後の土曜なので今日、明日の買出し人種はさぞ多いことだらう。和歌山で紀勢西線に乗りかへる。坐れる。東和歌山からの乗客はすでに坐席なし。田辺あたりまで満員、それから先きは大分車内も空いた上、窓外の海が美しく、春らしい陽気なので楽しい旅の気分になる。那智駅附近の明るさには驚く。太宰治「右大臣実朝」九分通り読むと新宮に着く。竹本君が乗り込んでくる。三時木本着、南紀らしい眩しいほど明るい。竹本君の家は海岸でなんともいへず気持よし。書齋兼居間も海の音が聞え、こんなところで暮す竹本君が羨しくなる。一時間程、海岸へ寝転んで雑談。

た朝食の気持よさは忘れんだらう。明るい椽側、波の音、そしてどこか田舎らしい気分。実にいい。新宮に降り、竹本君の友達の市村君の家にゆき、前のホテルに案内して貰ひ、荷物だけおいて、市村君のアトリエにゆく。女の来客あり、あまり面白からず。市村画伯またなか／＼竹本君などと同格の人間ならず。ずるいやうな上手な反面も、嫌な反面も感ずる。九時辞去、宿で二時間程床に入り雑談。さすがに少々疲れてゐる。

三・二七 五時起床、六時新宮発にのる。駅で木本へ殆んど同時刻の下りで帰る竹本君と別れる。来た時の列車に比すと大分混んでゐる。前の坐席の女のひとどく親切に周囲の人に振舞ふ。重い荷物を持った人を見ると持つてやらうといい、老婆をみると優しくいたわる。併しつとめて／＼善事をなすの感あり、ただではないと思つてゐると、夫の英霊を迎へにゆく田舎の女なり。夫への供養のため善根をまいてゐたのかもしれない。美しくはないが、何かうら悲しいはかなさを感じる。途中から自分も立つてゐる女の人に席をゆずる。

夕食、さすがに御馳走、素晴らしく大きいビフテキも出る、みんな美味しい。十二時まで話し込む。

三・二六 九時起床。疲れなし。午前、魚（サワラ）を交渉に魚屋にゆく竹本君に連いてゆく。一時の便で送れるといふ。三重県は持出し禁止外の県なので、すべて簡単、鉄道チツキで大丈夫といふ。半信半疑の気持なり。竹本君、大きな魚の荷造りをしてくれる。

十一時より鬼ヶ城にゆく。南紀の突端は神々もこんな岩でもすえなければおさまりがつかなくかつたのだらう。二時帰宅。夕食後新宮にゆく予定にし、それまで海岸で日向ぼっこし乍ら雑談。竹本君の家で飼つてゐた鶏をつぶす。お土産に持ち帰るもののだが、竹本君の家のものなので値段を聞くわけにもゆかず、結局頂戴することに決める。夕食、豪壮な魚すき、鯛が六七匹大皿の上に並んでゐる。たらふく喰べる。奥さんが、奥さんの分もお子さんの分も喰べて下さいといふ。竹本君のお母さんに挨拶し六時の汽車にのる。奥さん駅まで送つてくれる。実にいゝ一家だ。こゝでたべ

三時、大阪着、荷物を茶屋に預け、出社、五時帰宅、チツキの魚まだ駅に来てゐない。家で久しぶりで鶏のすきやき。

三・二八 京都より母（義母・足立ヤシ）来る。魚のチツキまだ来ぬ。

三・二九 夕方チツキ駅に来てゐるので持ち帰る。こちらでは一匹八十円位ゐる由、京都の母も、ふみも歓声を上げる。久しぶりで御馳走、みんなに美味しい美味いといはれるので行つた甲斐があつた。小林君と京都印象氏宅へゆき、楠公展の本読み、菊ノ井（高台寺）で夕食。

三・三十 辻氏にさわらのお土産、四時社を出て京都へゆく。大谷へ長男の入学祝ひのコーモリと父へさわらを持つてゆく。母が茨木に来てゐるので父、淋しさう。千代ちゃん（ふみの末妹）東京よりお客さんがあるので、父の世話が大変の由、無理もないが、あまり判然

りいはれるといゝ気持しない。十時帰宅。

三・三一 ふみ、母に留守番を頼んで幾世の洋服を買ひにゆく。午前中牛乳をとりゆき乍ら、自転車の鑑札貰ひに役場にゆく、帰りにさくらを買つてくる。陽気は例年になく寒い、部屋に桜があるといかにも春らしく美しい。出社一時半、夕食辻氏の御馳走（未広）、病院通ひ今日で終りの由、夜勤。竹本君より気持よい手紙。

四・一 漸く春の陽気、和田女史、犬飼君とお茶、建設、豊田君に牛乳持つてゆく、夕方小林啓三君とまたお茶。山口勝一追悼の会の鶏二羽を頼む。依頼してある軸は三越の美術部の人に任せる由。スエヒロで四円八十銭の夕食とつて帰宅。

四・二 日曜、雨、日曜だし明日より幾世学校がはじまるので奈良へでも連れてゆく予定だったが雨で駄目、竹本君に礼状、同君宛のお茶とアスピリンの小包

で半日つぶす。風呂沸して夕方より夜にかけて時間をとられて終ふ。

四・三 曇、寒し。森守明氏宅へ絵の礼を持つてゆく、帰り長谷川（茶舗）により大小の茶罐、茶碗（赤はだ焼）等を買ふ、途中雨に降られ三時帰宅。再び家を出て社にゆく。

四・四 例により正午過ぎ出社、今夜は故山口勝一氏宅に小谷、玉井、橋本女史等四人集つて、持ちよりの材料ですき焼、ぜんざいを奥さんと二人のお嬢さんにたべさす会を計画。鶏を手に入れる役目仰せつかつたので、小林啓三君に一枚加つて貰ひ、鶏を都合して貰ふ手筈を決めておいた。約束通り四時六甲三共社に行つたが、小林君、弟さんの出征で急に帰郷、肝腎の鶏も間に合はぬ由、朝、社に連絡したさうだが、聞いてゐなかつたので少々周章てる。致し方ないので社の橋本女史に電話をかけ相談、すき焼なしで、簡単に会食することにする。六時、甲子園着、少し時間が早い

ので浜甲子園の近くで一円の定食二つ、一寸気の利いた食堂で気持よし。六時半過ぎに山口氏宅へゆく、一同既に来てゐる。結局山口家に迷惑をかけることになり気の毒なり。女学校へ入学した踊りのうまいお嬢に腕時計一個みんな進呈に決め、目録だけ呈上しておく。赤めしと、ぜんざい。お嬢さん二人淋しさう。奥さん少々ヒステリックで怖い顔になつたと思ふ。命日には一人も来なかつた由、人情紙風船の如し。結局喰べる話許り、玉井君がゐて非常に陽気なり、結局山口氏の話は何もしない。この方がいゝと思ふ、十二時半帰宅。

四・五 乳取り、金線堂より救急箱一個買ふ。出社一時、文化研究会、久しぶりで聞くが雑談。今日初めて春らしい陽気、外套なしで出社、紅茶、ペーキング・パウダー、修一のリユック・サツク、カレー等の買ひもの。明日社で非常時訓練、西宮で輪転機を廻す由。自分はこの訓練に関係ないが、さすがに時局のなみなみでない感強し。昨日西宮三共社で鶏二羽明日は

必ず間に合せ社に届けるといふので、一羽山口家に、一羽こちらでたべるつもりで一日待つがつひに来ない。いゝ加減な約束に少々あきれる。小林君もこんな人たちばかりを使ふのでさぞ大変だらうと思ふ。社で夕食をたべ七時帰宅。

今日は五日なので詩の集りのある日だが、いつかこの会も立ち消へなり。詩人といふ連中のくだらなさには少々あいそがつきた形、幹事として怠慢の責は免れぬが、怠慢にならざるを得ぬ次第。人間的魅力のある人一人もなし。なぜだらう。高安君、野間君などさすがに光つてゐる。

四・六 乳と買物。一時出社。暖くいゝ日和、社を三時に出て高島や、心さい橋筋を歩き、幾世と修一の洋服を探す、誂へは全部二ヶ月程の日数がある、いつ空襲あるか解らぬこの頃、金をすてるだけのやうな気もする。結極、買はないで帰る。朝、竹本君より来信、餅と海豚を送つてくれた由、有難い極みである。夜竹本君と大伴へ手紙。天野さんから貰つた干柿でオウス。

十二時床に就く。

四・七 雨、夜、隣組常会山杉邸で開く。貯金割当多くなる由。戦闘帽を心さい橋筋の店で買ふ。大伴、竹本君へ手紙。

四・八 午前、座敷の床の上の戸棚整理、爆撃に備へて茶碗類は二階に運び、危くない紙類を入れる。一日降つたり止んだり、豊田君より待望の小豆を手に入れる。夜、小豆を焚く、久しぶりで美味し。風呂。夜遅くなつて又雨、併し暖し。今夜はさすがに早く入浴したが湯がぬせぬ。社にて歯の治療。

四・九 曇、日曜、九時起床、昨日豊田君より入手した小豆で昼食おほぎ。子供たち大悦び、座敷の戸棚整理。子供たち二人連れて斬髪。

四・十一 小谷君が午前中に乳を取りに来る。お札に油を貰ふ。一時出社。

四・十四 竹本君よりの待望の小包到着、お餅、海豚の干物、鰯の生干等、早速お餅で夜お汁粉、社で竹本君に礼状、夕方帰宅すると竹本君より手紙、十八日來阪の通知、牛肉持つて来てくれる由。牛乳は明日も休み、竹籠買つてくる。

四・十五 京都へ茶碗とキウスを買ひにゆく。産寧坂の長谷川といふ茶屋で赤膚焼のキウス四、五個と煎茶茶碗の小さいの。帰り河井寛次郎氏の家により二時間程、話をきく。例によつて面白い。二時出社。このころ三時間勤務、工藤信一郎欧米部長となる。運のいゝ男である。歯―奥歯結局駄目、月曜抜歯することに決定、憂鬱なこと夥し、竹本君へ速達、今度来たらお土産に棟方志功の絵を呈出しようかと思ふ。夜、入浴、なぜか今日はひどく疲れてゐる。明日の日曜は家の片付け、必要なものだけの清潔な生活がしたい。

四・十六 晴たり降つたり、四月も半ばといふのに薄ら寒く氣候不順なり。二階の幾世の部屋の戸棚片附

四・十二 午前中家の片付け、横のドブ掃除、今日は乳屋休み。出社一時、「建設」、歯の治療、高島屋で幾世のハーフ・コート注文、一ヶ月かゝる由、爆撃がこの間にあつたら最初のことゝてかなりの混乱予想されるので、切符とお金はふいになる。賭けみたいなもの。五時退社、このところ毎日二、三時間勤務。夜机の整理、楠公展の原稿のために「大楠公詳伝」(林弥三吉)をよむ。

早く家を片付けて手習でも初めたし。木本の竹本君からの待望の餅今に至るも到着せず、修一までが毎日待つてゐる。このころ栄養分不足、寝具の不用な一組を伊豆に送ることにする。

四・十三 十時家を出て京都にゆく、吉田(京都市左区吉田にふみの実がある)から一斗樽、ミルク等を貰つてくる。大きい不恰好な荷物だが無事電車通過、四時出社、居残り、一日なすなし。

け。結局一日つぶす。

四・十七 午前中階下の四畳半の押入片付け。出社一時。三時に抜歯、二十分程苦しむ。注射効かぬ由痛み甚し、脳貧血起しかける。編集局へ戻ると和田、増井両女史に顔面蒼白だといつて驚かれる。藤田信勝君又へん桃腺より誘発して絶対安静の由。気の毒也。辻氏も今年は厄年、一週間程前奥さんの母堂死去、それに重ねて母堂と同居してゐた伯母さんが又悪い由。夕方、竹本君より電報、明日十七時四十分頃天王寺着の由。

六・廿九(卓也入院中(心囊炎で京大付属病院に入院)) 五時起床、幾世に起こされる。炊飯、みそ汁。十一時野菜の配給小川さんにとりにゆく。伊豆へ小包の礼、森守明氏へ画の礼。出社すると部会開催中。振鈴。四時辻氏と退社、辻氏キヤベツとりに来る。キヤベツ、馬鈴薯、大根等とつてゆく。途中サイパンの悲劇について聞く。未発表なれば真相解らぬが、ただならぬ気持なり。松本宗

夫さんのことなど想ふ。沢山ある女子供たちはどうしたらう、卓也と同年の赤坊もゐたらうに。卓也その後、どうか案ぜられる、まだなんでもないとすると、また持ち直したかもしれぬ。

昼山谷君とお茶をのむ。ひどく希望なく無気力になつてゐる。これは誰も同様だが、彼は特に甚し。

六・廿(卓也入院中) 六時十分に眼がさめて、あわて、起床、幾世の朝食はじやが芋で間に合せ、炊いた御飯を漸くお弁当にする。塩と石鹼をとり市場附近へゆく。十一時出社、建設出して二時退社、幾世と五時から卓坊のお見舞にゆく。途中鉄道ホテルで食事、ビール一本、自由に入つて食事できるのはこゝ位ゐた。たれも知らぬらしい。赤い顔で病院へゆくのもどうかと思つてさますのに苦労する。結局真赤な顔でゆく。卓坊瘦せて却つて可愛くなつてゐる。これまでもつたので案外癒るかと思ふ。京都の母不治の病の疑ある由、母には知らさぬが、父が昨日病院に来てさう言つてゐたとのこと。八時半病院辞去、駅で吉田へ電話す

にぎらぎら輝いてゐるのを見詰めてゐた。若主人はモ一ニングで、これも合掌しながら棺を見送つてゐたが、棺が遠ざかると、追かけるやうに数歩づゝ、歩いてはとまり歩いてはとまつた。おばあさんは堪まりかね一瞬むせび泣いたが、直ぐそれに堪えて身体をふるはせてゐた。三人共胸は張りさけるやうであつたらう。三人の悲しみを傷けるのをおそれて、自分は棺が見えなくなると、くると脊を向け引きかへした。

八・十三 日曜、一時頃ふみ来る。病院は千代ちやんに来て貰つたとのこと、昼は簡単にして、夜天婦良の御馳走。六時半帰る。天野さんにお悔み、小杉さんに御礼に行つただけで何もする暇なし。卓也は全く化膿もとまり元気な由。今朝部長さんに診て貰ひ、外部よりみたところでは心臓と心嚢は癒着してゐない由、全く奇蹟的だ、尤もレントゲンでみなければ確実なことは解らぬが――

八・十六 五時起床して防空壕(十八日点検あるの

ると文次郎〔次兄ふみの〕氏出てくる。修坊〔長男修一〕喋りまくつてゐる由。母の病気はやはり本物らしい。癌の再発ではないかと思ふ。どこもかしこも大変なことなり。伊豆より米三升、鮎など頑丈な小包で来る。親でないときぬこと、有難い極みなり。今年はじめで、ショート・パンツに白の上着、白靴。

八・十一 昨夜宿直、空襲警報で大騒ぎ、中部地区はこれが最初なり。地下に待避したが、敵機は津山上空より逆戻り。二時帰宅すると、天野さんの坊ちゃん昨日亡くなり、今日告別式とのこと、直ぐ式にゆく。一人きりの子供をなくし親の身になつたら堪まらないだらう。修一を伊豆へやつてさへ心痛み、夢にまで見る、それを十六まで育て、しかも誰が見ても可愛い少年だつた。出棺の際、若主人、奥さん、それにおばあさんの三人は小杉さんの家の前に立つて、街道をゆつくりと遠ざかつてゆく葬列を見送つてゐた。奥さんは身動きもせず喪心の態で、微かに口をあけ、合掌しながら、四角い棺の上にかゝつてゐる金襴が八月の陽

で)を掘るつもりが眼がさめると七時半。配給来なくなつたので一昨日より非常時米の白米、さすがに少量でも腹にこたえる。十一時家を出る、昨日炭の配給一俵づつあつた由なるも留守のため貰へなかつたので組長のエビ原さんのところにきゝにゆく。どうなつてゐるか解らぬ。隣り近所の不親切なこと斯くの如し。嫌になつてしまふ。増井女史、松見君に昼食京松を御馳走。煙草どこにも売つてゐず閉口する。五時帰宅しようとしてゐると、辻さんに和田女史の見舞にゆかぬかと誘れる。自動車で堺の三国ヶ丘病院にゆく。腸チブスで入院してから七日目、熱高い様子、案外元気、十五分ほどで辞去。一家三人発病、それを看病して遂に自分もかゝつた由、帰途、堺の町と大阪の町も、自動車の窓よりみてゐると昔の貧民窟の如し、変貌ただならぬものあり、道を歩いてゐる人々もみなつかれて生色なし。

昨日、今日駅は疎開学童で雑踏。六時帰宅、明朝訓練で六時五十分までに出社せねばならぬので明朝の朝飯を焼き、傍ら防空壕を掘る。小豆煮る、竹本君のと

ころより砂糖少々来たので。うまし。

八・一七 防空訓練で六時五十分社に集合、なので心配して寝たせいか度々眼がさめる、五時起床。防空壕少し掘つて朝食、きつかり定刻に社に入る。十一時まで訓練、統制甚だ悪く結局何もしない。下田将美、長岡克暁、福岡多賀義、楠五郎等の講評、徒らに長い許りなり。ほんとの空襲の折、果してどれだけ活躍できるか、それより何人駆けつけるか、或は踏みとどまるか、これは興味ある課題だ。建設書いて、小林啓三君とビーコンで久しぶりで話す。画展の原稿頼まれる。三時退社。早く帰宅したが、天野さんのおぢいさんと庭で話したりして結局夕食七時、配給来ないので白米、天婦良、ぜんざい、御馳走なり。天野さんのおぢいさん顔負けするほど敗戦的、続く不幸で、斯うした考へになるのは無理からぬことかも知れぬ。

八・一八 炭屋が来て一俵紛失したことを訴へる。確実に十二俵、全隣組の分を果して配給して行つたか

ので、炊事をやる人が要るのだが、人を頼むには米が要るし、またく困惑する。それまでに卓也の退院は無理だ。印象さんからの絵来らず、時間が、留守中配達されることになるので、こんなことが一番嫌だ。

竹本君に木本行延期の電報を打つ。

八・一九 十一時出社、夕方、ふみに電話すると、退院間近い模様——土井先生がさういつたとのこと。真実、吻とする。急に元気が出る。多分点呼予習までに戻れることだらう。七時帰宅、炊餐、茄子を煮る、うまし。辻さんから佃煮貰つたが社において来たので明日とりにゆくことにする。竹本君、辻さん、大谷三軒へお礼する品を考へる。オウスうまく四杯のむ。今頃幾世、修一どうしてゐることか。大阪でも集団疎開の真際中だが、なかく大変な様子、先生も苦労だが、離れた親の心配も大変な様子なり。

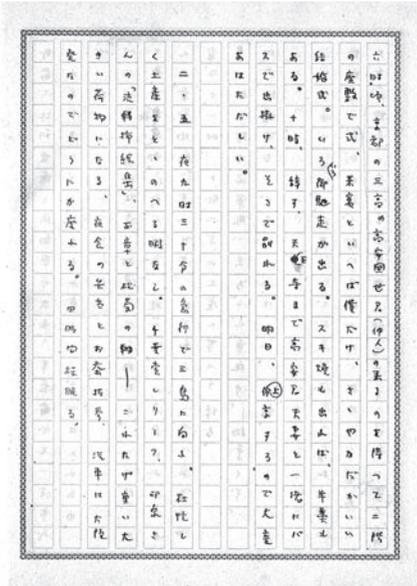
八・二〇 日曜、大雷雨で五時前に眼がさめる。約二時間、雷鳴と豪雨。今朝七時半より高橋さんの英霊

どうか信疑の程はわからぬが、兎に角それを弁償することに別に一俵配給して貰ふ。二俵の代金で一俵買つたわけだが、とに角配給されたので助かる。

出社、「建設」、五時に京都へゆく、出張だが、社の仕事は次の機会として、病院へゆく、卓也大分元気なるもまだ来月半ば頃までは入院してゐなければならぬかと思ふ。安藤の伯父さん、釘抜きで眼をついて眼科に入院してゐる由、話してゐるとやつてくる。大分の重傷らしい。入院三日目で悲鳴を上げてゐる。この点、ふみの奴感じないのか、忍耐強いのか、怖ろしいくらい、併し栄養不良なのか蚊にくはれた後が全部うんでゐる。七時、夕食をたべに吉田にゆく、文次郎氏来てゐる。持参のビールでいっぱい。相変らず儲かるのか儲からぬのか、うまいのか下手なのか、ブローカー商売に忙しさう。父大分むくんでゐる。危つかしい感じ。人間八十になると、最も確りしてゐる人間でもこんなになる。帰宅十二時。市電にしる省電にしる時間的に元の倍はかゝる。車中の人みな疲れてゐる。廿日から点呼訓練あるが、六時四十分家に出来なければならぬ

を迎へる準備の道路の清掃がある予定だったが、雨で出来ない。洗濯と掃除で一日暮す。五時警戒警報、大急ぎで夕食をすまし、当番ではないが出社してみようと思つて家を出たが、近所のラジオが警戒警報を伝へるので、又逆戻り、防空壕は今朝の雨で水がいつぱい也。仕方ないので溝に入ることにして畳だけを上げて持出して置く。七時空襲警報解除になつたので、停電で真暗な家にゐても仕方ないので様子を知りに出社。日曜出勤の犬飼君と、防直の植村君の二人だけ、他はたれも出社してゐない。直ぐ帰宅。九州及び門司、小倉間で敵機二十機以上撃墜の由、まづ大戦果なり。

八・二一 宿直なので遅出、三時出勤、竹本君に手紙、名古屋の広告の鳥飼君より和辻哲郎の著書送つてくれる。小谷、平井君と夕方、共同ビルでビール一杯。大変な人なり。並ぶこと約二十分、切符持つてゐてこれだから、切符から手に入れるとなると随分大変な努力だらう。宿直、窓をあけてねて風邪気味。



軍服姿でやってきた野間宏に請われ(1944年2月3日)、翌日の野間の結婚式(新婦は富士正晴の妹)に新郎側ただ一人の友人として出席している(2月4日)



親友・竹本辰夫を木本に訪ねる。この南紀の風景は、その後、小説やエッセイで繰り返し描かれることになる(3月24日)

八・二二 六時起床、十分寝てゐるがやはり宿直だと疲れる。二時まで仕事。山上貞一氏に、興亜文化会議の発言の原稿承諾の手紙。三時帰宅。夕食の仕事。七時、病院に行くため家を出る。夕立がぼつ／＼してゐる。病院にゆくと、今日の服部先生の診察の結果、牛乳さへ入手できたらいつ退院してもよいとのこと。これで三ヶ月の苦しい生活もやつと終りに近づいたわけなり。明日牛乳の配給を頼みに、保健婦さんに会うことにする。退院の支度、荷物、大きい風呂敷にしばい持つてかへる。相変らず雨模様。ひどく疲れる、十一時帰宅。夕食に天野さんより天婦良もらふ。若奥さんが持つて来てくれる。坊ちゃんのことを話す。

八・二三 七時起床、警察署へゆき兼子保険婦嬢に牛乳三合の証明書を買ひ、町会長宅、役場、配給所と自転車で駆け廻り乳三合にありつく。これで先づ卓也の食糧を確保する。十一時高橋さんの英霊帰還、焼香にゆく。出社、山口久吉君来阪、門司の空襲体験記を部会できく。七時帰宅、炊事。夕食終ると十時、やも

め暮しも後二日。

八・二四 七時起床、牛乳とりによく、十一時出社、煙草の売出品、二日振りで両切にありつく。部会、食物の話、午後社会部会で東京社会部長飛鳥定城の話大きく、元氣潑潑なり、ただそれだけの人ならむ。居残り、京松と社ですます。ふみに電話、明日三時頃退院とのこと。やれやれ、興亜文化会議の原稿、帰宅執筆。

日記全体を通して、日に日に戦時色が濃くなっている様子が伝わってくる。「マーシャル玉砕」(二月二十三日)、「サイパンの悲劇」(六月二十九日)など日本軍の敗退を知り、「ただならぬ気持」を抱いている。八月に入れば空襲警報も出て、防空壕を掘り始める。食べ物に関する話題が多いのは、食糧事情が切迫しつつあったからに違いない。

そうした厳しい状況の下、井上家では追い打ちをかけられるように次男卓也が入院する。妻ふみの母も病に見舞われている。四月十七日を最後に六月二十九日まで日記が飛んでいるのは、余裕のない毎日を過ごしていたためであろう。

卓也には妻ふみが付き添い、靖は長女幾世と大阪の自宅で生活し、朝食や弁当の準備をしていたようである(六月三十日)。長男修一をやむなく伊豆の実家に預

けたらしく、心を痛めている(八月十一日)。卓也の退院に備えて牛乳集めにも奔走していた(八月二十三日)。今日においては父親として当然の行動と言えなくもないが、当時家庭は妻に任せるのが常識であった。井上靖はこの時代の父親として、十分家族思いの一面を持つていたと言えよう。

他方、井上靖は橋本関雪の絵を手放すことで、多額の借金整理がようやく済んでいる(二月九日～二十一日)。京都帝国大学卒の新聞記者として、高給取りと言いつても得る立場にあつたはずであるが、それ以上に贅沢を好み、相当の浪費家であつたのだろう。食糧難であるのにビールをしばしば飲んでいる。これまた井上靖の人間臭い、しかしどちらかと言えば負の一面である。

新聞記者としての活動に目を向けたい。

前号の「解説」で記したように、井上靖はこの時期「振鈴」と題する読者投稿欄の編集を担当していた。二月二十五日の日記では、その「振鈴」に関連して、以下のように書く。

諸君も思ひはみな同じであつたらう。／英霊につづけ、英霊につづかう。孤島に奮戦、最後まで祖国の運命を思ひ、その勝利を祈つて笑つて噎れてくれた英霊につづかう。／さあ、涙をふるつて起つんだ。一機を十機に、いや百機にするまで闘つて、闘つて、闘ひ抜くんだ。(後略)

井上靖は右の文面に「興奮し」、「戦ふ覚悟」を抱かされた。だからこそ掲載すべき投稿文として選んだ。今日の視点から軍国主義に染まっていたと批判するのは当たらない。新聞記者という立場から、日本軍の明らかなる劣勢を知らされていく中、祖国を愛する気持ちに素直に従っていたと考えるべきである。

なお井上靖は同じ二月二十五日の日記で「元寇前後以来なかつたこと」とも書いている。『毎日新聞』(大阪版)を確かめると、二月十六日、十八日に東大史料編纂所長・龍肅による論説「元寇を想ふ」(上・下)が、四月八日には京大教授・西田直二郎による論説「元寇」(連載「国難突破」第二回)が、それぞれ掲載され

今日午後四時クエゼリン、ルオット両島守備隊の発表ある筈なので、発表後二三日の振鈴記事をつくる。「莫煩惱」「英霊につづけ」等を書いてみて、次第に興奮してくる。一億祖国の運命を考へる時代、長い歴史の上でも、元寇前後以来なかつたことだらう。クエゼリンの勇士たちの如く、自分も亦最後の一人になつても戦ふ覚悟ができてゐる。

二月二十六日『毎日新聞』(大阪版)は、前日十六日の「大本営発表」を報じている。「クエゼリン島並にルオット島を守備せし約四千五百名の帝国陸海軍部隊は(中略)最後の突撃を敢行全員壮烈なる戦死を遂げたり」。井上靖はこの日本軍のいわば玉砕の発表に合わせた紙面作りを考えていたのである。実際、二月二十七日「振鈴」欄には「神戸・山辺生」との署名で、「英霊につづけ」と題した次の<sup>\*</sup>とき文章が見られる。

悲憤に寝られなかつた一夜は明けた。一億の同胞

ている。当時の日本社会では、米国、英国等に挑んでいた自国の戦争を「元寇」に擬する風潮があった。井上靖もその影響を受けていたのである。後年、「風濤」(一九六三年八・十月『群像』)を創作した作者のモチーフの一つの源として注意されたい。

さらに三月四日に「振鈴を固めて掲載」し、翌々日の六日には「振鈴」が「建設」と改題され、「改題の挨拶を書いた」と日記では記す。

まず三月四日の「振鈴」欄を見ると、「私の非常措置―反省・直ちに贅肉切捨て―」とのタイトルで、日記の記載通り読者投稿が七本固めて掲載されていた。その冒頭には次のような挨拶文が置かれている。井上靖が書いたものと推察できる。

いよいよ明日から決戦非常措置が実践にうつされる。も一度しつかりと反省してみよう。私にはもう切捨てる贅肉がないか、どうかを！ 今日限り直に戦ひに徹する、その大切な第一歩を飾るためにここに盛り上げる国民の声をおくらう。いずれも

本紙「振鈴」欄へ寄せられたものである。

次いで三月七日『毎日新聞』(大阪版)には、やはり六日の日記に見る通り「振鈴」から「建設」へ、改題の挨拶が掲載されている。これも井上靖の執筆と見做せる文章として引用する。

改題おしらせ 本欄はけふからこれまで多年慣れ親しんで戴いてきた「振鈴」の呼称を廃し「建設」と改題いたしました。「振鈴」当時同様、御民われの自覚に徹した草莽の志、建設的意見の発表機関として特殊な使命達成にさらに邁進します。読者各位の従前に増す御協力を切望します。

どちらも戦争を遂行する国家の要請をそのまま伝えた趣がある。どこまでが本音であるか確かめようもないが、井上靖も戦時下の記者として、このような記事を著わさざるを得なかったのである。

他にも記者としての仕事を日記から拾っていくと、

三月十八日の「楠公展の打合せ」が目にとまる。以下、

「楠公展の原稿」(三月十九日)、「楠公展の本読み」(三月二十九日)、「楠公展の原稿のために『大楠公詳伝』(林弥三吉)をよむ」(四月十二日)と続く。一方、『毎日新聞』(大阪版)は四月二十三日、「一億、楠公たれ廿五日から全国に『誕生運動』との見出しで次のように報ずる。

大楠公誕生して今年で六百五十年。大楠公奉賛会では大政翼賛会の積極的後援のもとに正成公誕生の四月廿五日から戦死の五月廿五日までの一ヶ月間を第一回国民戦意昂揚期間として一億楠公誕生運動を全国一斉に展開。全国各市町村、学校、工場などでもこれに呼応して記念祭、講演会などを繰りひろげ決戦下国民士気の一段の振起を促すこととなった。

この「楠公誕生運動」は四月二十六日以降も頻繁に報じられ、二十九日には日記で参考文献の著者名とし

て挙げられている林弥三吉が解説文<sup>\*2</sup>を書いている。

これらの記事について、井上靖がどの部分をどれだけ担当したかは不明である。しかし記事作成の中心であったのは間違いあるまい。国策的なイベントの紹介であり、井上靖も戦時下の記者の役割を担っていたことが改めて確認できる。

ちなみに井上靖は今号掲載の日記の間、本業と云うべき美術批評も三つ書いていた。四月二十八日、五月五日、七月四日の『毎日新聞』(大阪版)にそれぞれ発表された「春の青龍社展」、「陸軍美術展」、「大日展評」である。いずれも現在では『井上靖全集』第二十五卷(一九八七年八月、新潮社)に収録され、容易に読むことができる。しかし日付に見る通り、全て日記の空白期間に当たる故に、執筆時の心境は残念ながら書き残されていない。

井上靖が記者として接した、二人の人物との関係にも触れておきたい。

まず河井寛次郎。四月十五日の日記で「二時間程、話をき」き、「例によつて面白」く感じた」と記す。そ

の一ヶ月前の三月十四日、十九日には、「河井寛次郎氏の茶碗、壺」を含めた「荷物」の「疎開」を決めたとも書いている。

井上靖は幾つかのエッセイで記者時代に河井寛次郎のもとをしばしば訪れ、自分と対等に接する河井の人柄に魅了されたと同想している。井上靖が壺を所望すると、河井が「井上さんのところへゆくか」とその壺に語りかけ、譲ってくれたエピソードも紹介している。<sup>\*</sup>「疎開」させた壺は、この河井より頂戴したそれと判断してよからう。二人の交流の深さ、井上靖の河井への敬意を裏付ける記述である。

次いで元学芸部長・井上吉次郎。三月十六日の日記で「終生忘れられぬ恩義を受け」たと感謝している。前号、前々号に掲載した日記では、井上吉次郎への烈しい厭悪を記していた。それが時間の経過とともに変質し、素直に有難く思えるに至ったのであろう。後年、井上靖は井上吉次郎をいわば記者時代の恩師として紹介している。<sup>\*4</sup>まさに憎しみを乗り越えて生み出された、深い感謝の念がそこには表れているのである。

郎の詩「明治の軍歌―陸軍記念日―」<sup>\*5</sup>が確かに掲載されている。タイトルから窺われるように、当時陸軍記念日であった三月十日に合わせて作られた、いわば国策詩である。しかし、井上靖は該当の詩を「底に一抹の憂愁を湛えてゐる」と評し、作者についても「この人だけが或は日本の詩壇で自分を失はぬ人かも知れぬ」と肯定している。時節柄、このような作品しか発表の機会を得られなかったはずであり、同詩も作者の本意に基づいていなかったかもしれない。井上靖はそれでも小野らしさが表現されていると考えたのだろう。詩人仲間の苦悩を慮ったコメントと解釈したい。

同じ日に笠野半爾とは「五月刊行の『艦載機』の原稿四月十日までに持ちよる約束」をしている。「艦載機」とは、同人詩誌か合同詩集を指すのであろうか。如何にも戦時色が表れた題名であり、その内容が気になるところである。しかし、現物は残念ながら確認できていない。

四月五日には「詩の集り」が立ち消えになっている。詩の仲間たちも生活に追われ、それぞれではなかつ

文学上の交流関係においても、詩の仲間を中心に執筆すべき記述が多い。

二月三日に野間宏と一年ぶりに会い、翌日に野間の結婚式に新郎側ただ一人の友人親戚代表として出席している。新婦は詩人富士正晴の妹である。この結婚式については、野間自身が『水壁』の人―井上靖の人と作品―（一九五七年二月『別冊文芸春秋』）で触れている。野間は前年一九四三年に思想犯として大阪陸軍刑務所に収監され、年末に出所したばかりであった。故に野間家側は出席者が見つからず、詩人仲間であった井上靖に急遽依頼し、引き受けてもらったと明かしている。野間宏と井上靖の対談「詩から小説へ」（一九七五年一月『群像』）でも、二人の思い出として同様のエピソードが語られている。日記の記述はこれらの証言に重なり、二人の絆の強さを改めて確認させる資料として貴重である。

三月十日の日記では「小野十三郎氏の詩」について言及。同日の『毎日新聞』（大阪版）には、小野十三郎の「くだらなさ」を感じ、「人間的魅力のある人一人もなし」と酷評。おそらく信頼していた仲間であった分、幻滅も大きかったのだろう。対して「野間（宏）君」と京大時代からの親友「高安（敬義）君」の二人には「光つてゐる」ものを感じ、改めて信頼を示している。当日記では身近な人々に対する好悪を包み隠さぬ記述が目につく。これもその一つと言える。

さらに「木本の竹本君」。井上靖は当日記でしばしば言及し、その人柄を手放しで絶賛している。当時毎日新聞社熊野通信員であった竹本辰夫を指す。一九四三年五月から同年十一月の間には大阪本社地方部デスクを務め、学芸部にいた井上靖と席を隣り合わせた人物である。<sup>\*</sup>二人の交流は、一九九九年十月『皇学館論叢』に翻刻・掲載された竹本辰夫あて井上靖書簡十二通によって詳細が明らかになった（濱川勝彦・大井一郎翻刻・解説「井上靖・未発表書簡（十二通）」創作への情熱と友情の書）。同書簡は世田谷文学館『井上靖展』図録（二〇〇〇年四月）にも転載された。ただし、

これらは戦後の一九四七年から五二年の間に投函されたものであった。今回、二人の戦時中における関係も明らかにしたわけである。

井上靖が竹本辰夫との交流から如何なる影響を受け、自らの文学にどのように反映させていたのか少し詳しく確認してみよう。

三月二十五日、木本に到着して「眩しいほど明るい」と感ずる。翌日には木本海岸の「鬼ヶ城」を訪れ、「南紀の突端は神々もこんな岩でもすえなければおさまりがつかなかったのだらう」と書く。

井上靖の散文詩「渦」（昭和二十二年四月『詩人』）は次のように書き出される。

静かな初冬の日、藍青一色に風いだ南紀の海はその一角だけが荒れ騒いでいた。波浪は鬼ヶ城と呼ばれるその岬の巨大な岸壁を咬み、底根しらぬ岩礁のはざまはさまに、幾つかの大きい渦をつくっていた。

「南紀の海」と「鬼ヶ城」は、初の新聞小説「その人は言えない」（一九五〇年五月十日～九月三十日『夕刊新大阪』）など、その他多くの井上作品でも繰り返して描かれている。<sup>キ</sup>つまり木本で見た風景は井上靖文学を形作る重要な場面として活かされたのである。

三月二十七日、木本から大阪へ帰る車中で「ひどく親切に周囲の人に振舞ふ」女性を見かける。その女性は「夫の英霊を迎へにゆく」ところであった。

井上靖の連載エッセイ「忘れ得ぬ人々」（一九六五年一月～十二月『主婦の友』）には、「喪服の女」との一節がある。この車中での経験を経ったものと見て間違いない。同エッセイには「大阪で新聞社に勤めていた頃」に木本の竹本辰夫君の家で厄介になった帰りの出来事として紹介されているからである。その女性については「その旅で見た美しい熊野の海の色と一緒に、私の心から消えることはない」とも書いている。

こちらも竹本辰夫を訪問した旅と結びついた思い出として、井上靖の記憶に定着していたと言えよう。

一九四四年二月一日から八月二十四日にかけて、井上靖は新聞記者として国策に沿った仕事にもやむなく取り組んでいた。その一方で、家族を思い遣りながら文学上の交流を大切にしていた。いつ終わるともわからぬ戦時下の辛い毎日を、家族愛と文学への志をもって耐え忍んでいたと言えるかもしれない。

\*1 同日の日記にもう一つ題名の挙がっている「莫煩惱」は、不掲載だった可能性が高い。一九四四年二月二十日から一ヶ月間の「振鈴」（建設）欄を確認したが、見当たらなかった。

\*2 林弥三吉『大楠公詳伝』は一九四一年八月、新弘亜社刊。該当的林弥三吉による解説文は「純忠の大聖将」と見出しがつけられている。

\*3 「河井寛次郎のこと」（初出『河井寛次郎作品集』一九八〇年九月、朝日新聞社、「忘れ得ぬ芸術家たち」一九八三年、新潮社収録）、「河井寛次郎論」（一九九〇年四月『鳩よ！ 特集 詩人・井上靖の世界』）参照。

\*4 「私の自己形成史」（一九六〇年五月十一日『日本』）、「序」（井上吉次郎『通信と対話と独語』一九六九年五月、井上吉次郎博士賀寿記念出版刊行会）参照。

\*5 同詩の本文は次の通り。

水雨降る／夜明けの街を／一隊の兵が通る。／明治の軍歌を歌ひながら。／軽機や擲弾筒を持つ／現代の歩兵一小隊の装備は／昔日に比較すべくもないが／歌ふ明治の軍歌は永久に新し／い。／さすがに四十年前の今日。／ロシヤを奉天の西に潰走せし／めた国民が日夜愛唱しきたつ／た隊の生命だ。／それはいまわれらの想像を絶／する龐大な鉄量のながれの／中で／豪壮無比な本来の調子を取り／戻した。

／水雨降る夜明けの街をゆく／明治古軍歌。

\*6 「竹本辰夫君のこと」（一九六五年八月『毎日新聞社報』）参照。

\*7 井上靖は「紀の国・伊豆・信濃」（一九五四年九月『暮しの手帖』）、「南紀の海に魅せられて」（一九六〇年七月『旅』）、「南紀美し」（一九六六年六月『若い11名古屋テレビ50 特集南紀II尾鷲熊野』）、「私の好きな風景」（一九六一年十二月～一九六二年十一月『マイホーム』）等のエッセイでもその風景について語っている。

〔付記〕当時の『毎日新聞』（大阪版）本文は句点のみで読点を置いていないため、紙面からの引用では読点を補っている。また旧字体は新字体に改めルビは省いた。井上靖の作品引用は、『井上靖全集』全二十八巻・別巻一（一九九五年四月～二〇〇〇年四月、新潮社）に拠った。

## 祖父・井上靖探し

### 井上敦夫（井上靖孫・井上靖記念文化財団専務理事）

一九九一年一月二八日、オーストリアのウィーンに住んでいた私たち家族のもとに日本から知らせが入った。祖父・井上靖の危篤の報であった。父（修一）は、母（甫王）と私たち子供を置いて、一足先に日本に帰国し、遅れて母と私たち子供も帰国することになった。

私が中学に上がってすぐ、父のウィーン大学留学に伴い、家族全員でオーストリアのウィーンに引っ越した。ウィーンでの生活は行く前に抱えていた不安が嘘のように楽しく、充実したものであった。ウィーンで出逢った日本人の友人は、親が大企業や国連、大使館に勤めていることが多く、年に一度は一時帰国が認められているようであった。しかし、留学生であった私

の父は日本に帰国することはなかった。そのため、祖父の危篤の知らせがあるまで、一時帰国したいという私の思いは叶わなかった。

日本へ向かう飛行機の中、子供ながらに祖父が本当に危ない状態であることは、頭では理解していたと思う。しかし、私はそれを現実のものとして受け止めることができていなかった。飛行機の中では、日本に着いたら小学校時代の友人に会うことばかり考えていた。しかし、飛行機が成田空港に着陸すると、目を背けていたことが現実のものとなった。母が到着ロビーの売店で『朝日新聞』『毎日新聞』など教紙を購入したところ、一面に大きく掲載された祖父の訃報の記事が目飛び込んできた。目の前が真っ暗になった。

井上の家族は、祖父の家を「世田谷」と呼んでいた。帰国後、世田谷に着くと、門の周りは絶え間なく行き来する弔問客とマスコミで溢れかえっていた。後で知ったが、八〇〇名くらいの弔問客がいたそうである。

マスコミの間を潜り抜けて門の中に入ると、弔問客とそれを迎える親戚や関係者が忙しなく出入りしていた。玄関に入ると、久しぶりに会った親戚らから「敦夫ちゃん、大きくなったわね」と次々に声をかけられ、なんだか気恥ずかしかった。靴を脱ぐとすぐに、大勢が待機していた応接間を抜け、その奥にある書斎へと連れて行かれた。祖父は書斎で顔に白い布、打ち覆いをかけて寝かされていた。先に帰国した父が枕元に座っていた。二年ぶりに対面した祖父は大分痩せて小さく見え、顔を触ると固く冷たかった。しかし、その時はなぜか涙は出てこなかった。

翌日、祖父が納棺され、霊柩車にのせられ、斎場に向かう時である。世田谷の門の前に父が立ち、親族を代表して弔問客、マスコミの前で挨拶を行った。挨拶の内容は覚えていないが、その時に、急に涙が溢れて

止まらなくなったことを記憶している。あれ以上に涙を流したことはない。

私の祖父の記憶はこの日を最後に止まった。私は祖父の孫の中で下から三番目。男孫では一番下。祖父の生前、祖父と過ごした時間も短い。もちろん、祖父について、決して記憶がないわけではない。ただ、その思い出は家族や親戚と共に過ごした時のものである。みながよく口にする正月の思い出はもちろんある。

正月は、親族や遠い親戚、祖父母と関わりがあった方々が世田谷に集まった。私たち孫は世田谷に着くとまず応接間に行き、来客者の前で挨拶をする。それが終わると、そのまま二階に上がり、みなで遊んで過ごした。なぜかテレビでジャッキー・チェンの映画が放送されていることが多く、男のいとこたちがそれを見ては少林寺拳法の真似事をした。いつしか本気になり、最後は喧嘩して誰かが泣いて帰る。その繰り返しであった。正月の思い出は、祖父の記憶と言えるかどうか怪しいものである。



祖父と筆者。1976年11月3日、文化勲章親授式後に「世田谷」にて

私は、世田谷の家から三〇〇メートルも離れていないところに住んでいた。母が世田谷の来客の手伝いに行くことも多かったから、世田谷にもよく行った。しかし、祖父はいないことが多かったし、いても書斎に籠っていた。たまに、孫たちの声を聞いて、書斎から出てくることもあったが、「どこの子かい」と尋ね、私だと知ると満足して部屋へ戻って行った。

振り返ると、私の記憶の中にあるのは、いつも祖父としての井上靖であって、作家・井上靖ではなかった。小学生だった私は、まだ作家としての祖父と時間を過

ごすには幼な過ぎたのだろう。私は大人になるまで、作家・井上靖のことを何も知らなかっただけでなく、知らないことにも気付いていなかった。

正確には覚えていないが、二〇〇七年の祖父の生誕一〇〇年を記念して開かれた「井上靖展」を観に行った時のことだと思う。祖父の展示会には、湯ヶ島の昭和の森会館をはじめ、子供の頃によく連れて行かれた。いつも何を見るでもなく、一周して見た気になって帰るのが常であった。「井上靖展」の時は、私は既に三〇歳を過ぎていたが、いつもどおり、展示物を何となく眺めて会場を後にしようとしていた。その時、出入り口に展示されていた祖父の家系図の前で、女子高生たちが熱心に祖父の小説に出てくる登場人物と現実の人物とを紐付けて話しているのが耳に入ってきた。祖父の小説の登場人物と私の親戚の話であるのに、私にはほとんど理解できなかった。展覧会を見に来た女子高生より、祖父のことを知らないことが、衝撃であった。それから、私は作家・井上靖のことを知りたいと思

うようになった。祖父の小説を読むようになった。叔父の井上卓也が書いた『グッドバイ、マイ・ゴッドフアーザー——父・井上靖へのレクイエム』、叔母の黒田佳子が書いた『父・井上靖の一期一会』、伯母の浦城幾世が書いた『父井上靖と私』も読んだ。私の脳の中にある、祖父に関する記憶の点と点が結びついていくのを感じた。

祖父のことが書かれている新聞記事にも目を通すようになった。一番印象に残っているのは「敦煌」の記事だ。「敦煌」は一九八八年、私が小学校六年生の時に映画化された。当時、映画を観に行ったし、原作も読んでおり、「敦煌」は祖父の作品の中でも好きだった。この物語は、敦煌の莫高窟で発見された大量の古文書は、一体、誰がどんな理由で隠したのか、をテーマにしている。祖父は、敦煌が西夏に滅ぼされる直前に、その「文化」だけでも後世に残すために、緊急避難的に、貴重な書籍や經典を窟に運び込んだものとして、運び込むまでの人間模様をドラマティックに描いている。当時、私はそれが史実だと思っていた。

私と同じように、祖父の小説を読みそれが歴史上の事実であると思いついている人も多かったと聞いているが、『毎日新聞』の「田原由紀雄の心のかたち 莫高窟蔵経洞の謎」(二〇〇九年八月一七日、大阪夕刊)という記事によれば、現在の歴史学では莫高窟が不要になった經典の捨て場だったという説が有力になっているという。

だが、私には史実はどちらでもよかった。むしろ、大江健三郎氏が祖父が亡くなった翌日の『朝日新聞』に寄せた「井上さんは深い思想の小説家ではなかった。鋭い感覚の詩人でもなかった。しかし、いったん物語を語り始めると、その小説も詩も独特な魅力あらわした」(一九九一年一月三〇日)という言葉と結びついて、祖父の物語がなぜ魅力的で、読む人を引き込んでいくのか、初めて理解できたような気がした。

改めて、今の私の祖父の記憶は、祖父が亡くなって以降、私が「祖父探し」をして得た知識によって書き添えてきたものだったことに気が付く。

昨年も、『伝書鳩』（第二十四号）の「終戦前後日記」を読み、祖父が毎日新聞記者時代の、芥川賞を受賞する前から、京都の瓢亭に出入りする一方で金策に奔走している姿や、太宰治がそうであったように、まだ取れぬ芥川賞を意識している姿を知った。

私は、二〇二二年から、高齢の父に代わり井上靖記念文化財団の理事を拝命している。祖父のことを知らない私が務まるのか不安があったが、評議員、理事の皆様が理事会、評議員会で、生前の祖父の話をしてくださるのが嬉しい。今年六月の理事会の後には、日中文化交流協会に勤めておられた佐藤純子さんに、阿佐ヶ谷のモロッコというバーに連れて行っていただき、祖父との中国旅行の話、そして政治的な対立を離れた祖父と中国との親交についての話をたくさん聞かせていただいた。

また先日、職場の上司から、高野山別格本山普門院に行ったら、祖父が毎日新聞記者時代に「闘牛」を執筆した部屋があったと聞いた。全く知らなかった私は、バツの悪い思いをした。後日、『伝書鳩』編集室の

西村篤から「私の高野山」というエッセイの中で、将棋の対局を取材に行った祖父が、「早春の、まだ寒さの残っている高野山」で、「二人の若い棋士の死闘をよそに、普門院の一室で、最初の小説を執筆していた」と書いていると聞いた。「最初の小説」とは、「猟銃」とともに芥川賞を受賞することになる「闘牛」のことだろう。

最後になるが、私が子供の頃は、教科書に必ず祖父の小説が掲載されていて、読書感想文にもよく取り上げられた。しかし、祖父が亡くなってから三〇年以上が経った今、私の子供の教科書に祖父の作品はない。娘の学校の読書感想文の課題図書に「天平の薨」が採用されていたが、学生が購入しにくいという理由で、変更になったという話も聞いた。

私は、祖父・井上靖の孫として、これからも祖父のことを知りたいと考えている。そして、祖父のことを知らない私の子供たちに、少しでも祖父のことを伝えていければと考えている。

◎当財団から長泉町へ、五十万円の指定寄付

井上靖文学館は、一九七三年、『あすなる物語』の中で詠まれる歌にちなみ、愛鷹山の麓、静岡県長泉町東野の地に開館しました。当時は井上靖も存命中であり、開館時はこちらも、その後も当館には何度も足を運んでいます。二〇二一年、文学館の事業がスルガ銀行から長泉町に譲渡され、町営の施設「長泉町井上靖文学館」として再スタートをきりました。

二〇二三年の開館

五十周年には、記念式典や企画展などが開催されましたが、それを受けて財団から寄付を行うことになり、二〇二四年一月三十一日、長泉町役場にて贈呈式が行われました。



贈呈式にて、財団理事長の浦城義明より池田修町長へ目録が手渡されました(2024年1月31日)



井上靖文学館の開館式典に出席する井上靖・ふみ夫妻(1973年11月25日)

長泉町井上靖文学館  
〒411-0931 静岡県駿東郡長泉町東野515-149  
☎055-986-1771

Facebook X Instagram

当財団理事長の浦城義明が「文学館開館五十周年の節目に、さまざまな企画をしていただけだったことに大変感謝している。今後も祖父の井上文学を守っていきたい」と述べ、池田修町長へ目録を手渡しました。

長泉町井上靖文学館は、企画展をはじめ、講演会、ワークショップ、出前授業など、井上靖の作品を読み継ぐ活動を精力的に行っています。機会がありましたら、ぜひお立ち寄りください。

## 事業報告

## 井上靖記念文化財団事務局

一般財団法人井上靖記念文化財団と旭川市の間に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」により、両者は日本文化の振興及び発展への寄与を目的に協力して井上靖記念事業を実施いたしました。

令和五年度は、井上靖文学館（長泉町）の開館五十周年、井上靖記念館（旭川市）の開館三十周年のメモリアルイヤーにあたるため、井上靖関連事業も活発に行われました。

## （一）文化賞授与事業

第七回井上靖記念文化賞は、令和五年十一月一日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、令和六年二月十七日に開催した選考委員会

（選考委員は、川村湊・栗原小巻・高橋源一郎・建畠哲・伴野昭人の各氏）において、写真家の石内都氏を井上靖記念文化賞に、漫画家の安彦良和氏を特別賞に決定しました。

令和六年五月十八日に旭川市において贈呈式及び受賞記念講演会を開催しました。石内都氏は「横須賀から「ひろしま」へ——私写真と戦後史」、安彦良和氏は「古今の歴史を描く」という題目での講演でした。

なお、これまで選考委員をお務めくださいました辻原登先生、酒井忠康先生、赤木国香氏が、第六回をもちまして退任されました。第七回からは高橋源一郎先生、建畠哲先生、伴野昭人氏に選考委員をお願いしております。

## （二）国内外における日本文化の研究助成

## ○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』への刊行助成を行うとともに（第二十二号が令和五年七月に刊行）、同会のホームページ管理にも助成を行いました。

## ○ベトナム

平成二十七年に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」の第六回は、令和四年十月三日より募集を始めました。令和五年十月に、応募総数十九件の中から研究者部門二件、学生部門二件を入賞作品として決定し、十二月九日にハノイ市にて授賞式が行われ、当財団から黒田佳子評議員が参加いたしました。選考には、国家大学ハノイ人文社会科学大学、ベトナム文学院、国家大学ホーチミン市人文社会科学大学から三名の先生方をお願いしています。

## （三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

## ○本財団ホームページ

更新・管理をしました。

## ○井上靖記念館（旭川市）

令和五年七月二十五日、『旭川市井上靖記念館報』第二十三号の発行に協賛しました。

常設展示の他に、左記の企画展三回と特別展を本財団と共催で開催しました。

第一回…「井上靖の描いた戦国武将」展（令和五年五月二十七日～九月二十四日）

第二回…「普遍言語へ——詩人・吉増剛造の世界」展（令和五年十月七日～令和六年一月二十八日）

第三回…「井上靖 人と文学14 記者から作家へ」展（令和六年二月三日～六月二日）

特別展…「井上靖記念館 開館から30年の歩み」展（令和五年六月二十四日～九月二十四日）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○長泉町井上靖文学館

常設展示の他に、以下の開館五十周年記念企画展を本財団の後援で開催しました。

企画展「井上靖と芥川賞」展（令和五年三月十八日～九月十二日）

企画展「わたしを変えた井上靖のことば」（令和五年九月十六日～令和六年三月十二日）

企画展「井上靖のメッセージ 遺したい50の名言」（令和六年三月十六日～九月十七日）

（四）近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・ア

ルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている本財団機関誌『伝書鳩』第二十四号を十二月に発行しました。

（五）講演会などの開催事業

○青少年エッセーコンクール

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で第十二回「井上靖記念館 青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事）、伴野昭人（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「歌」で、応募総数二六一編の中から中学の部六作品、高校の部六作品を入賞に決定しました。表彰式は令和五年十二月十日に市内の井上靖記念館で開催されました。

最優秀賞

中学校の部・趙琳琅「縁の歌」（東京都・筑波大学附属

中学校二年）

高校の部・武田真凜「歌が私にくれたこと」（東京都・

白百合学園高等学校一年）

北海道新聞社賞

中学校の部・柴田珠綺「私がここに立つ理由」（北海道・北海道教育大学附属旭川中学校三年）

道・北海道教育大学附属旭川中学校三年）

高校の部・三宅由梨杏「歌と橋と祖父とイライザ」（東

京都・白百合学園高等学校三年）

優秀賞

中学校の部・菊地灯「追悼のトランペット「冬の夜」

より」（東京都・筑波大学附属中学校二年）

高校の部・鈴木晴菜「平和の鐘」（北海道・北海道旭川

永嶺高等学校二年）

佳作

中学校の部・坂東輝大「僕と歌と変声期」（東京都・筑

波大学附属中学校二年）、世名城藍花「マオリ族とハ

カ」（沖縄県・開邦中学校三年）

高校の部・大本茉弥「短歌を詠む」（大阪府・大阪桐蔭

高等学校二年）、辻本千尋「望郷の歌」（東京都・桜丘

高等学校三年）

井上靖ナカマドの会賞

中学校の部・西野目実亜「小さな勇気と逢坂のせき」

（北海道・旭川市立緑が丘中学校二年）

高校の部・長澤葵依「全力少女」（北海道・北海道旭川

東高等学校二年）

○あすなる忌

令和六年一月二十八日（井上靖の命日に近い日曜日）

に、伊豆市湯ヶ島町の熊の山墓地と天城会館劇場ホールで、伊豆市・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、長泉町井上靖文学館・本財団等の後援で、「あすなる忌」が開催されました。募参ののち、「井上靖感想文・感想画コンクール」の表彰式、栗原小巻氏による朗読「井上靖『あすなる物語』より」が行われ、開催にかかわる経費を助成しました。

「井上靖感想文・感想画コンクール」は応募作品四五  
五点から以下の十二作品が入賞いたしました。

感想文

最優秀賞

山崎楓「しろばんばの里から」(伊豆市立天城小学校六年)、木村日向子「隠された愛情に気づく」(東京都・筑波大学附属中学校一年)

優秀賞

三須愛那「洪作のように強く生きる」(伊豆市立天城小学校六年)、志村由梨「正しい選択」(東京都・筑波大学附属中学校二年)

佳作

矢田安奈「はじめての「しろばんば」」(伊豆市立天城小学校六年)、上西桜央「変わらぬ思い」(東京都・筑波大学附属中学校一年)、若槻理彩「人生という愛の長旅」(東京都・筑波大学附属中学校一年)

風景画

最優秀賞

白井祐好「シヤクナゲが咲く頃」(伊豆市立修善寺中学校一年)

優秀賞

鈴木悠唯「学校の障子から見える日本一きれいな富士」(伊豆市立修善寺中学校二年)、加藤木那白「別れの瞬間」(三島学園知徳高等学校二年)

佳作

北田結愛「初めての海」(伊豆市立修善寺中学校三年)、田村心晴「かきの木」(伊豆市立中伊豆小学校六年)

(六) 特定寄附事業

令和五年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

(七) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催し等がありました。

○井上靖記念館(旭川市)

「井上靖 短編を読む」、①「信康自刃」(令和五年六月三日)、②「伊那の白梅」(八月十九日)、③「補陀落渡海記」(十月二十八日)、④「本多忠勝の女」(令和六年

三月二日)、講師・平野武弘氏(井上靖記念館職員)、朗

読・塩尻曜子氏(井上靖ナカマドの会会員)

令和五年五月六日、「井上靖生誕日記念事業 無料

開館・ミニコンサート」、演奏・なよとよ

令和五年七月二日、文学講演会Ⅰ「井上靖と千利休」、

講師・熊倉功夫氏(ふじのくに茶の都ミュージアム館長・

国立民族学博物館名誉教授)

令和五年九月九日、文学講演会Ⅱ「井上靖の叙情の

琴線——審美の工房からポエムの回廊へ」、講師・藤澤

全氏(元日本大学教授)

令和五年十月十四日、文学講演会Ⅲ「井上靖「蒼き

狼」について——作品論争も視野に入れて」、講師・石

本裕之氏(国立旭川工業高等専門学校嘱託教授)

○井上靖ナカマドの会(井上靖記念館内)

令和五年八月二十六日、『赤い実の洋燈』五十九号発行

○長泉町井上靖文学館

井上靖文学館開館五十周年事業プロジェクト「井上靖の作品を後世に読み継ぐ」として、クラウドファンディング(令和五年八月一日〜十月二十九日)で一二五万三〇〇〇円(目標金額一〇〇万円)を調達し、以下のイベントなどが催されました。

記念講演会「万城目学、井上靖ワールドときどき長泉町などについて語る」、講師・万城目学氏(十一月十八日)。記念式典(令和五年十一月二十五日。彫刻家堤直美氏制作による井上靖ブロンズ像除幕式、女優山本陽子氏の「しろばんば」朗読会、鳩型風船リリースなど)。記念ブックレット『わたしを変えた井上靖の1冊』の発行(十一月二十五日)。そのほか、文庫本プレゼント、紙製ファイルプレゼントなど。

この井上靖文学館開館五十周年事業プロジェクトに関し、当財団から長泉町へ、五十万円の指定寄附を行いました。

○世田谷文学館

「衣裳は語る——映画衣裳デザイナー・柳生悦子の仕事」展（二〇二三年一〇月七日～二〇二四年三月三十一日）において、井上靖原作の映画『敦煌』『風林火山』の資料が展示されました。

（八）役員

令和五年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長 浦城義明  
専務理事 井上敦夫  
理事 岡崎正隆 狩野伸洋 佐藤純子 勝呂奏  
野崎幸宏  
監事 佐藤弘康  
評議員 浦城幾世 相賀昌宏 表憲章 黒田佳子  
小西千寿 三木啓史 山口建

（五十音順）

なお、理事・監事及び評議員は、令和六年六月十日に開催された評議員会の終結時に任期満了となっておりますが、全員、同評議員会にて重任されております。加えて、ソウルオリンピック柔道銅メダリストで、日本大学スポーツ科学部教授の北田典子氏が理事に、井上靖と同じ静岡県立沼津東高等学校出身で、『わが母の記』（井上靖原作）などの映画監督である原田眞人氏が評議員に、それぞれ新たに選任されましたので、ご報告申し上げます。

令和六年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次のとおりです（令和六年十一月三十日現在）。引き続き、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

理事長 浦城義明  
専務理事 井上敦夫  
理事 岡崎正隆 狩野伸洋 北田典子 佐藤純子  
勝呂奏 野崎幸宏  
監事 佐藤弘康  
評議員 浦城幾世 相賀昌宏 表憲章 黒田佳子

小西千寿 原田眞人 三木啓史 山口建

（五十音順）

吉田哲也（北海道新聞旭川支社事業担当）

令和五年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です（令和五年四月一日時点）。

委員長

野崎幸宏（旭川市教育委員会教育長）

副委員長

齊川誠太郎（北海道新聞旭川支社長）

尾崎吉一（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）

委員

佐藤弘康（旭川市教育委員会社会教育部長）

荒川美智（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川

市井上靖記念館長）

監事

三原一仁（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）

（九）住所・連絡先

一般財団法人 井上靖記念文化財団

〒一五六―〇〇五三

東京都世田谷区桜三丁目五番九号

電話・FAX…〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会 事務局

〒〇七〇―〇〇三六

旭川市六条通八丁目 セントラル旭川ビル七階

旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内

電話…〇一六六―二五―七五五八

FAX…〇一六六―二五―八二二〇

## 編集後記

『伝書鳩』二十五号をお届けします。

祖父靖のお金に対する無頓着ぶりについては、良くも悪くも多々の逸話を聞いてきましたが、日記を読んでもより納得させられました。

借金はかさんでいる、戦時下で物価が急上昇しているのに仕事は減っている、そんな中でも「食指」の動くまま。そして美術記者として知り得た人脈を使い、美術品の転売で借金を返済しようと算段する様子は危うげです。

しかし、戦後お金に困らなくなつてからの祖父が、美術品を求め手元に置いたのは、作品自体を好んだこととはもちろん、苦しい時代に助けられたことへの感謝の気持ちがあったのかもしれない。

今後も『伝書鳩』をどうぞよろしくお願い申し上げます。

西村承子



## 伝書鳩 第25号

発行 二〇二四年十二月二十七日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三二五一九 井上芳

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団